
RED ZONE

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED ZONE

【ZONE】

Z9504Z

【作者名】

天音由羽

【あらすじ】

この世界には夜の闇に巢食つ獣達を裁く者達がいた。

「魂を狩る者」

それは、限りなく闇に近い危険領域「RED・ZONE」に踏み込むことを許された者達の事である。

「RED・ZONE」…

少年達は闇に生きる

Stage 1

この世界には夜の闇に巢食う獣達を裁く者達がいた。

「魂を狩る者」
（シウル・ハンター）

それは、限りなく闇に近い危険領域「RED・NONE」に踏み込むことを許された者達の事である。

「RED・NONE」…

少年達は闇に生きる

Stage 1

時刻は午前一時を回っていた。

とあるマンションの一室、バタンとドアが音をたてた。

暗闇の中に白いシャツがぼんやり浮かぶ。

「二人はまだか…」

「ふう」

ため息が冷たく響いた。

パチン

スイッチを押すと、一気に部屋中が明るくなる。

その眩しさに少年は少し目を細めた。

そしてゆっくりとソファに腰をあおる。仕立てのいい高級ソファは

彼の身体を受け止めて沈む。

長い足が少しだけ窮屈そうだ。

そうして彼が少し落ち着いた頃、事態は急変した。

ピピピピピ

ケータイがけたましい音を立てる。

「はい？」

「あつ、蒼衣つ？」

やたら焦った声がする。

「伽羅が倒れたんだ」

その言葉に少年の表情が一変する。

「右腕二ヶ所に切り傷負つてて、しかもかなり深いんだ。どうしたらしいっ？」

「何…？分かった、とりあえずそこにして。すぐ行く」
ピッ

少年は勢いよく立ち上ると、玄関にあるケースを取り、そのまま部屋を出る。

どうやら緊急事態のようだ。

勢いよくエンジンをふかし、バイクを飛ばした。

口元に通信機を持つていく。

「どうした？蒼衣君か？」

イヤホンから澄んだ低めの声が聞こえる。

「はい。至急第三倉庫に車で向かってください。俺もすぐ追いつきます」

いつもより早く口で少年は言つた。

「ミスしたのか？」

すり抜ける風の音で相手の声にノイズが混ざる。

「ミスじゃないですよ。任務は完了です。でも伽羅が重症らしいんです」

ぐつ

そう言つてハンドルを握る手に力を入れた。

少年は更に風を切つていく。

「重症？分かつたすぐに向かう。オペの道具は？」

相手の声にも緊張が表れる。

「持ちました。あつちに着いたら無菌シートをワゴンの後部座席に張つておいてもらえますか？」

「了解」

ピッ

通信が切れた。

バイクはどんどん加速する。

落ち着いているように見えるが、やはり焦っているらしい。

少年、新堂蒼衣は真夜中の道路を走り抜けた。

その頃、倉庫内では蛍と呼ばれていた少年が、気を失って横たわる少女の腕に応急処置を施していた。

少しだけ不慣れな手つきだ。

何で倒れたんだろう

心の中に疑問が浮かぶ。

目の前で倒れている少女伽羅は、夕飯もしつかり食べ、常のトレンジングの結果、体力が無く倒れたとは考えられない。ましてミッション中にミスなどするはずも無いのだ。しかし蛍には一つだけ気になる事があった。

伽羅が倒れる寸前の、あの表情。

伽羅、怯えてた…

蛍は静かに眠る伽羅の顔を見つめた。

痛みも苦しみも顔に表れていない。

ただ静かに眠つていてるだけである。

蛍は止血を終えると自分の上着を伽羅にかけた。

それからすぐ一台のワゴン車が現れ、一人の秀麗な人物が蛍の前に姿を現した。

「彼女を車の中に移動する。君は足の方を持つてくれ」

「…はい」

蛍は戸惑いながらも従う。

この人、一体誰なんだ？

喉まで出かかった疑問を、寸でのところでひとまず飲み込む。

今はそんな時ではない。

一人が伽羅を移動させると、すぐに蒼衣も駆けつけた。

無菌シートの中で素早く蒼衣が処置を始める。

伽羅の腕の傷口はパッククリ開いていた。

「酷いな、縫うしかない。蛍、局部麻酔打てるか？」

「ああ」

蛍は一本の注射器を受け取ると、伽羅の細い腕にスッと針を入れる。

「どのくらいかかる?」

先刻表れた人物が問う。

「すぐです」

「そうか。しかし……君達のバイクはこちらで届けさせよう。このまま君達のマンションへ直行する。作業、出来るか?」

「はい。お願ひします」

蒼衣は一言そう言つと、早速作業を開始した。

そしてすぐに車が動き出す。

蛍はじつと蒼衣の手元を見ていた。

「蛍、当時の状況分かるか?」

蒼衣が問う。

「少しだけ」

蛍の表情が一瞬沈んだ。

「分かることだけでいい」

作業を続けながら蒼衣が言つた。

「分かる事つて言つても何もないよ。伽羅は突然倒れたんだ。……それだけ」

「それだけ?」

蒼衣が問う。

突然倒れるなんて、伽羅は貧血持ちではないはずだ。

「うん。でも怯えてたんだ、倒れる寸前」

「怯えてた……?」

一体何に?蒼衣の中に疑問が浮かぶ。

今回の件で伽羅が怯える材料など無かつたはずだ。

「それで、そのまま今に至るのか?」

「うん。でも不思議なんだけどさ、伽羅、腕に傷を負つても痛そうにしてないんだ。倒れてからずっと、ほら今みないた表情のままで

「痛みを感じていなーってことか?」

そういうえば麻酔を打つ前から痛がつていなかつたと、蒼衣は瞬時に記憶をたどる。

この状態、どこかで見た気がした。

力チャ

手にしていた道具を置くと、鈍い音がする。フツと蒼衣の中に何かがよぎつた。

遠い過去の記憶…。

「伽羅、伽羅」

蒼衣は呼びかけてみた。

しかし反応は無い。

「やつぱり…傷のせいじゃないな」

蚩にそう言つと蒼衣はポケットから携帯電話を取り出した。

「もしもし雪乃さん？」

蒼衣が言つと、かすかに相手の声が聞こえる。

蚩はじつと様子を見ていた。

「心の殻に閉じこもつた場合、どうすれば出せる?..」

「心の殻? それって伽羅ちゃんのこと?..」

少し高めの声がする。

「うん。何が理由なのかはまだ分からんんだけど」

「……」

「雪乃さん?」

蒼衣が呼びかける。

「あのね、まさかとは思うけど思い当たるのはこれしかないの」

雪乃にしては珍しく回りくどい言い方だ。

蒼衣は眉をひそめる。

「四年前の、例の事件。覚えてるでしょ? 忽べりく今もあの時の状況と同じなんじゃない? ターゲット」

「うん…でも標的の中には誰一人いなかつたのに」

「死体は確かめた?」

!?

雪乃の言葉ではつとある。

「確かめて、ない」

「やつ…」

ため息混じりに雪乃が呟いた。

「戻せないかな、このままじゃ…」

ぎゅっと唇をかみ締める。

情けない 蒼衣は拳を握りしめた。

伽羅はまるで人形のように眠り続けている。

「戻せないことは無いわよ、蒼衣ちゃん」

「え?」

くすっ

電話越しに笑つたような息遣いが聞こえる。

「安心しなさいって。でもね、戻すのは私じゃないと出来ないわ。

もちろん蒼衣ちゃんにも手伝つてもらひつけだ

「うん」

雪乃の声に少しだけ安心する。

「マンションに向かつてるんでしょ?すぐ行くわ

「でも雪乃さん、修一さんは?」

「修一やんなら大丈夫よ。私達も指令オーダーが来てて、さつき帰つてきた
ところなの、そうじやなかつたらじつして電話になんか出でないわ
明るく雪乃が言つ。

確かに最もだ。

「じゃあまたあとで」

「ええ」

ピ

二人の会話が終わる。

萤は息を吐くと窓側に背をつけて座り込んだ。

「マンションまでどれくらいですか?」

蒼衣が運転席にいる人物に問う。

「すぐだよ。あと五分もあれば着く

「やうですか」

そういうつて蒼衣も静かにゆっくりと腰を降ろした。

「レッド・ゾーンか・・・」

蒼衣がふと呟く。

「レッド・ゾーン」とは、命の保証など存在しない、危険領域のことである。

蚩は無意識に蒼衣の方を向いていた。

「何で伽羅は倒れたんだろう」「ひ

まるで自分に問い合わせるように蚩が問う。

「封印された過去のせいだ」

「?」

「伽羅にとってそれはタブーなんだ。その過去がほんの少しでも蘇れば今のような」

蒼衣は目で伽羅を指した。

蚩はまだ伽羅を見つめる。

それからすぐ四人を乗せた車は、あるマンションの前へ着いた。無言のまま蚩は蒼衣の道具ケースを持ち、伽羅を抱き上げて車を降りた。

「私はこのまま本部へ戻る。もし異常があつたらすぐに連絡してくれ」

「はい、ありがとうございました」

蒼衣が軽く頭を下げる。

そして車はあつという間に走り去つていった。

「俺、先に行つて鍵開けてくる」

「ああ、気を付けるよ。足元暗いから」

「うん」

笑顔でうなずくと蚩は走り去つていいく。

蒼衣はゆっくりと歩き始めた。

腕の中で伽羅が静かに寝息を立てている。

伽羅、一体何を見たんだ？それとも読んだのか？

心の中で語りかけたが反応はない。

二人が部屋へ着くとすでに明かりはつき、伽羅のベッドもあとは伽羅を寝せるだけの状態になつていた。

「局部麻酔なのに何で起きないんだ？」

蛍が静かに問う。

ポフ

蒼衣はそつと伽羅をベッドに降ろし、毛布を掛けた。

「まさかこのまま・・・」

「安心しろ、大丈夫だ。止血も早かつたし傷 자체もそれほどじゃない。今は肉体的疲労が重なつてるので、そのうち目覚めるだろ。命に別状はない」

蒼衣は優しくそう言つた。

その様子に蛍は安心したのか、息を吐き笑顔を見せた。

そして二人は静かにドアを閉め、リビングへ向かう。

AM 3:00

外はまだ眠りに満ちている。

蛍は黙つて外を見つめていた。

二人の間に沈黙が訪れる。

しかし蛍は聞きたいことが山ほどあつた。

いつもならそれをすぐ問うところだが、何故か今回だけは聞いてはいけないような気がして、蛍は黙つていた。

まるで魚の小骨がノドに刺さっているような気分だ。

蒼衣はそんな蛍の気持ちを察していた。

「蛍、いつか時が来たら必ずお前にも話すよ。でも今はまだ知らない方がいい。知らないいいんだ」

蛍に目を向けて静かに言つ。

「まだ知らないいい？」

蛍は蒼衣のほうへ向き直つた。

心の中で反発している自分がいる。

何故自分には教えてくれないのか、と。

「俺はガキじゃない、そつ言いたいんだり?」

「つ、そつだよ俺はもつ…」

蒼衣の言葉に蛍はぐつといらえる。

すると、ポンと頭の上に蒼衣の手が乗せられた。

「?」

蒼衣は微笑んでいる。

「そつじやないんだ。お前がガキだからとか、年下だからとか、そんな事は関係ないんだ。俺は伽羅を守りたいだけなんだよ」

「伽羅を…?」

蛍の表情がふつと変わる。

「封印された過去の事を、伽羅はもつ忘れてる。それを思い出せたくないんだ」

どこまでも優しい蒼衣の声に、蛍は今までぐつと入れていた力を抜いた。

蒼衣は何を言いたいのだろう。

蛍は蒼衣の言葉に耳を傾ける。

「伽羅の知らないところで、伽羅を守つてる人がいる。その事を本人が知れば興味を示すだろ? そうなつたら困るんだ。だから周りには知つてほしくないんだよ。何が今動いてるのかつて事を」

「真剣だつた。

こんなに温かくて真剣な蒼衣の表情を見るのは初めてだつた。何だか自分が恥ずかしく思えてくる。

蛍は静かにソファに座つた。

「ごめん」

そんな言葉が自然に出てくる。

「俺やっぱガキだ。何も考えてなかつた。ただ知らない人がいきなり現れたりして、頭がついていけなかつただけなんだ…」

蛍はそう言つて苦笑した。

そしてスツと立ち上がり自室へ向かい、蒼衣に顔を向けると

「おやすみ」

蒼は明るくやう言つて部屋の中へ入つていつた。

- 聖… -

深い溜息が口をつく。

話せないことがもじかしい。

蒼衣はキツチンへ行き、ヤカンを火にかける。

そして食器棚からマグカップとコーヒーを取り出した。

一種のリラックス法であり、眠気覚ましもある。

蒼衣はもう一つ袋を取り出した。

これは伽羅の分だ。

用意を終えると蒼衣はソファに座つた。

もう少しすれば雪乃がやつてくる。

そのせいか落ち着けば落ち着こうとするほど落ち着かない。

早く伽羅を助けてほしい、蒼衣は心底そう思った。

伽羅のことが心配なのだ。

いてもたつてもいられない蒼衣は立ち上がり、伽羅の部屋へ向かう。ドアを開けると伽羅は相変わらずのまま眠つていた。

伽羅の鼻の辺りに手をかざす。

- 息はしてるな -

蒼衣は安心して毛の長い柔らかな絨毯の上へ座つた。

しかしすぐに不安がよぎる。

全ての記憶が甦つているのではないか…。

蒼衣は伽羅の心にシンクロしてみる。

蒼衣が生まれながらにして持つてゐる能力の一あからつだ。いつもならうるさいくらいに流れ込んでくる伽羅の感情、しかし今は何一つ流れでこない。

完全に伽羅は心を閉ざしていた。

全身から力が抜ける。

蒼衣はベッドサイドに寄り掛かり、天井を仰いだ。

静かにドアが開く。

「玄関開いてたわよ？無用心ね」

黒の上下に身を包んだ女性が苦笑する。

「雪乃さん…」

蒼衣は自然と立ち上がった。

「大丈夫よ、私が閉めておいたから。…そして」
一瞬にして彼女の表情が変わる。

柔らかな笑顔が消えた。

雪乃は目を閉じると伽羅の額に手を当てる。

「どうやら全てを思い出した訳じゃないようね。彼女が見てるのは
真っ赤な景色。これ以上この状態にしたら危ないわ。精神が崩壊す
る」

雪乃は手を離し、目を開けた。

「断片的な記憶が甦つてるわ。それも一番甦つてほしくない部分が
ね。とにかくもう一度封印して、伽羅ちゃんを起こすわ」

そう言つと再び雪乃是目を閉じて手を当てる。

蒼衣も静かに伽羅の感情にシンクロを試みた。
バツ

目の前に「赤い景色」が広がる。

蒼衣も目撃した四年前の景色だった。

血の色に染まつた真っ白なカーテン、小さな手についた真っ赤な血、
そして怯えながらうずくまる幼い伽羅…。

「伽羅、帰つて來い。お前がいる場所はそこじゃない。手を伸ばす
んだ、ホラ」

蒼衣は小さな子供の姿をした伽羅に手を伸ばす。

涙をいっぱいに溜めた瞳が蒼衣の方をじっと見つめた。

次第に伽羅の姿が成長し、今の姿に変わっていく。

「蒼衣…」

細い指が彼の手に届く。

蒼衣はぐつと伽羅の手を引き寄せた。

「よくやつたわ蒼衣ちゃん。そのまま起にして」

どこからか雪乃の声が聞こえ、蒼衣は伽羅を抱き起こした。

少しづつ景色が変わっていく。

そしてゆっくり田を開けると、伽羅はしつかりと蒼衣の手を握つていた。

「蒼衣？ あ… 私、赤い景色が…」

震える手で蒼衣の手を握る。

「大丈夫だよ、伽羅」

蒼衣は優しく微笑みかけた。

「伽羅ちゃん、まだ少し横になつてた方がいいわ」

「え？」

見知らぬ女性に伽羅が田を丸くする。

しかしうつくりと伽羅は横になつた。

すかさず雪乃が伽羅の額に手を当てる。

次の瞬間伽羅は再び眠りについた。

そして少しすると、雪乃は手を離した。

「これで大丈夫よ、記憶は封印したわ。後はこのまま田覚めるのを待つだけね」

「うん」

蒼衣がうなずくと、スッと雪乃は立ち上がった。

「じゃあ、私は帰るわね。私がここにいたら伽羅ちゃん戸惑つでしょ」

笑つて言ひ。

たつた一歳しか違わないのにどこか大人だ。

「正直言つて雪乃さんの事とか、もう話したいんだ。虫の奴も疑問に思つてるし、俺、いつか口滑らしちまいそつで」

「不安？」

まるで子供のように言う蒼衣に、雪乃は笑みをこぼした。

彼女の問いかけにほんの少しだけ蒼衣はうなずく。

「今日みたいな事、いつ起こるか分からない。伽羅を傷付けたくない

い

今までこらえてきた思いが自然と言葉になつていいく。

まるで姉と弟のような二人。

雪乃是姉のように優しく蒼衣を抱きしめた。

「蒼衣ちゃんの気持ちは分かるわ。私だって同じだもの。でもね、蒼衣ちゃんが弱気になつたらそれが伽羅ちゃんに伝わっちゃうわよ？それに…」

そこまで言つて一度だけ言葉を止める。

そして少しだけ息をつく。

「あの景色が甦つたつて事は、引き金になる何かと接触したつて事。それもミッション中つて事は、ターゲット標的に関係してゐる可能性が高い。大丈夫よ、きっと近いうちに決着がつくわ」

雪乃是優しくそう言つた。

少しずつその声のトーンと口調に蒼衣の不安も消えていく。

髪を撫でる雪乃の手はまるで母親のように暖かかった。

「ありがとう、雪乃さん。もう大丈夫だよ」

顔を上げて笑顔を見せる。

そして蒼衣の中に、ほんの少し昔の記憶が甦る。

十年前のあの日、蒼衣は今のように姉に抱きしめられていた。

雨の降る寒い日、幼い二人は恐怖に怯えながら廃工場の片隅でうずくまつっていた。

蒼衣は言い知れぬ恐怖の中、温かい姉の腕の中で小さな安心を感じていたのだ。

その記憶の前後をいつも思い出すことが出来ないが、蒼衣はほんの数秒だけの記憶でいつも優しさに包まれるのだ。

「それじゃあ、帰るわね。何かあつたらいつでも連絡ちょうどいい」

雪乃是そう言つと玄関のほうへ歩いていった。

見送りに蒼衣も玄関へ行く。

雪乃是笑顔で手を振ると、そのまま帰つていった。

蒼衣は思い出したようにキッチンへ行くと、火を止めてマグカップへコーヒーを注ぎ始めた。

部屋中に「コーヒーの香りが広がる。

マグカップを右手に持ち、ゆっくりとソファに座った。

後はまだ残つていぬミッションを慎重にこなすだけだ。

恐らく今日はこのまま朝まで起きていることになるだらう。

こんな時、伽羅ふと田を覚ましてリビングへ来ることが多い。

その時ここが真つ暗だつたら…。

蒼衣はその為に起きているのだ。

伽羅に寂しい思いはさせたくない。

何食わぬ顔をしていても、本心は寂しがり屋なのだ。

初めて会つた時からずっと伽羅はそうなのである。

小さい頃からきっとそうだつたに違ひない。

しかし本人にその頃の記憶はあまりない。

その頃の記憶が引き金になり、封印した過去を思い出してしまつ危険性があるため、「R - N」がその記憶を消させた。

だから蒼衣も詳しくは知らなかつた。

だがそれでいいと蒼衣は思つ。

伽羅が傷付かずに済むのなら。

そして蒼衣はそつと近づいてくる伽羅の傍にいてやることを選んだのだ。

それが伽羅の一番素直な心だから、と。

蒼衣は静かに瞳を閉じて息を吐いた。

キ

ふと小さな音を立ててドアの開く気配がした。

「起きてたんだ…」

声のする方を向くと、そこには伽羅の姿があつた。

ずいぶん早いお田覚めである。

再び伽羅が眠つてから、20分も経つていなければずだ。

「傷、開くぞ？」

蒼衣はそう言いながら、おぼつかない足取りの彼女に手を貸してソファに座らせた。

「大丈夫、このぐらいしょっちゅうじやない。虫も大げさだよ」

座る間際傷の痛みを感じたのか、少し顔を歪める。

「その虫がいなかつたら今じろり出血多量で死んでたかもしけないんだぞ？」

微笑んで蒼衣が言つと伽羅は小さく苦笑して俯いた。

「そつか…でも私覚えてないんだ。何でこんな怪我したのか、どこにいたのか、何してたのか」

不機嫌に顔を顰める。

蒼衣には、伽羅が思い出せないでいる理由がすぐにわかつた。雪乃である。

ミッション中のことを思い出せば、また赤い景色（あの景色）が甦る危険性があるため、ミッション中の記憶もデリートしたのだ。何も言われなくとも雪乃是ちゃんと分かつてくれている。

危険因子を見つければ、すぐに取り除いてくれる。

蒼衣はふつと安心して息をついた。

「何か知ってるの？」

不思議そうに蒼衣の顔を覗き込む。

その伽羅がいつもと変わらなくて、蒼衣は伽羅を抱きしめた。

伽羅はきょとんとしながら大人しくなる。

いつも優しい蒼衣だが、今はいつも以上に優しい。

嬉しいことには嬉しいのだが、何かあったのかもしれないと伽羅は思った。

「伽羅が無事ならそれでいい。生きててくれればそれでいい」

蒼衣は目を閉じ、そう言った。

温かい伽羅の体温にほつと安心する。

伽羅もまた、蒼衣の声に安堵した。

「虫はもう寝たの？」

「今何時だと思う？」

「あ」

伽羅が苦笑して蒼衣は彼女の肩越しに声を抑えながら笑う。

すると伽羅も笑い出した。

穏やかで優しい時間の訪れだ。

「 そうだ、ココア飲むか？」

思い出したように蒼衣は立ち上がる。

伽羅は少し微笑んで「うん」とうなずいた。

キッテンへ行きながら、椅子にかけておいたジャケットに蒼衣は手を伸ばし、

「 これ、はあつとけよ」

そう言つてパサッと伽羅の肩にかける。

「 ありがと」

伽羅は嬉しそうにジャケットをつかんだ。

背の高い蒼衣のジャケットは、伽羅をすっぽり包み込んでしまう。自分には大きすぎるそれは、まるで蒼衣のようになつに温かい。

伽羅はマグカップに注がれるお湯の音を聞きながら、嬉しさのあまり一人で笑つてしまつた。

「 何笑つてんだ？」

コン

軽く伽羅の頭をマグカップで小突く。

伽羅は頭上のマグカップを受け取つた。

手にココアの温かさがじんと伝わつてくる。

「 幸せ」

伽羅の口からは自然とそんな言葉が出てきた。

その表情に蒼衣の心配も和らぐ。

しかし、それも長くは続かなかつた。

「 私…なんでこんなケガしたの？」

「 え？」

ゆっくりとした伽羅の言葉に、蒼衣ははつと顔を向ける。やはり気になつていはないはずがない。

伽羅の疑問は当然のことだ。

しかし蒼衣は言葉に詰まり黙つた。

沈む蒼衣の表情を、伽羅は上田でじつと見つめる。

言いたくない理由があることは、薄々感じていた。

それでもケガが重いために、聞かずにはいられなかつたのだ。

「私…失敗した？」

「え？ いや」

優しく微笑み返す。

確かにミッションを失敗したわけではない。

どう言えれば伽羅を安心させられるのだろうか。

その言葉が見つからない。

するとそんな様子を察してか、伽羅はくすっと笑つた。

「「めんね、ちょっとしたイジワル。蒼衣は優しいから、きっと黙ると思ったの。私ちゃんと知つてゐ、どうしてこんなケガしたか」

「…？」

蒼衣の表情は一変した。

「まさか、全部覚えてるのか？」

「ううん、全部じゃないよ。でも私はミッション中に気絶して、腕を切られて…。そのあとは董の声がしてた。それだけ」

「それだけ？ 本当に？」

「うん。でも目をつぶると真っ赤な景色が広がるの」

伽羅の顔に不安が浮かぶ。

雪乃はうまく記憶を繋げておいてくれたのだろう。

確かにこの方が本人の疑問から生じるリスクの可能性は低い。

しかし蒼衣は伽羅の言つ「真っ赤な景色」という言葉に引っ掛かっていた。

「赤い景色つて？」

恐る恐る問う。

その記憶がどの程度か分からぬ。

蒼衣は不安を抱いた。

しかし

「よく分かんないの。ただ真つ赤な印象しかなくて、その中で黒い

影があるだけ。一体何なんか全然分かんない」「伽羅はお手上げといった様子でそう言つた。具体的な記憶でない分少しは安心である。

蒼衣は手元のマグカップを口へ運んだ。

「あのね

「うん?」

嬉しそうに伽羅が話し始める。

「夢の中で蒼衣に会つたよ。蒼衣が私の手を握つてくれてた。すぐあつたかくて、大きかった」

そう言って、自分の手と蒼衣の手を重ねる。

「やっぱり大きいね」

ひんやりとした伽羅の手が、ぎゅっと蒼衣の手を握る。

蒼衣は静かにマグカップを置いた。

「寒いのか?」

いつもより冷たく感じる伽羅の手を、蒼衣が両手で包み込んで握り返す。

伽羅は小さく首を横に振つた。

そしてそのまま蒼衣の肩に寄り掛かる。

「何、だかすごく疲れちゃつた…」

自然とまぶたが閉じられる。

伽羅の心は安心しきつていた。

蒼衣から伝わる体温が心地いい。

安らいで目を閉じた伽羅を、蒼衣はそつと抱きしめた。

死を感じるほどの恐怖を味わつた伽羅の心が疲れるのは当然だ。まるで仔猫のように伽羅は甘えている。

「傷は?」

「傷? 痛いよ、ちょっとだけ。でもヘーキ」

「我慢するなよ?」

「うん…」

そううなずくと、伽羅はすぐに眠つてしまつた。

「あーあ、風邪引くぞこりゃ」

蒼衣は苦笑すると伽羅を抱き上げ、伽羅の部屋へ運んだ。
まるで子供のように熟睡している。

よほど疲れているに違いない。

そして伽羅を見つめる彼自身も、軽いだるさを感じている。
やはり自分も疲れているのかもしない。

蒼衣は伽羅の部屋を出るとリビングの明かりを消して、自室へ入つていった。

眠いと感じはしないが、眠いのかかもしれない。

ベッドに横になると、体がぐつたりしているのが分かる。

蒼衣は静かに目を閉じた。

しかし

ウイー カタカタカタ

突然機械音がし始める。

本部とオンラインでつないであるコンピュータだ。

電子音がすると、コンピュータのディスプレイに映像が映し出された。

「蒼衣、寝ているのか？」

スピーカーから声が聞こえる。

蒼衣はやれやれと起きだして、コンピュータの前の椅子に座つた。

「寝ようとしたところだ。何だよ、こんな時間に」

少々嫌そうな様子で蒼衣は答えた。

「ずいぶんなご挨拶だな」

相手は声をあげて笑つている。

「ヤな奴だ。

今すぐにでもスイッチを切つてやりたい。

「おつと、スイッチを切るのはやめてもらひつか

「くそ……」

伸ばしていた指を引っ込む。

「それより蒼衣、雪乃から報告を受けたぞ、その後どうだ？」

相手は眞面目な口調で問ひつ。

蒼衣の様子も変わる。

「何だよ、優しいじやん」

蒼衣は不可解そうに言ひつ。

「まるで爆弾を抱えているようなものだひつへ。」

相手は冷やかに答えた。

「リスクがでかい。一人のせいでお前達、あの強とか言ひつ奴とお前の、二人に負担がかかる。場合によつては失敗もありうる。そうなればいくら國家がバックにあつたとしても、それはトップシークレットだからな、助けてくれるとは思えない」

まるで挑発しているような言い方だ。

しかし蒼衣は呆れたように息を吐くだけだった。

蒼衣は分かつっているのだ。

この少年「斗希」は、こんな言い方しか出来ないのである。お互い16歳で、しかも長い付き合いだ、性格もよく分かつている。しかし斗希は、これでも心配しているのだ。

「言ひていい表現と悪い表現があるだろ?…まあ、傷も思つたほどじゃなかつたし、全治2~3週間でとこか」

「どうか。上にはそう伝えておく」

斗希はそう言ひつと、少し間を置いた。

そして

「退屈じやないのか?」

ふと、そう尋ねた。

すると蒼衣の心が一瞬だけフラッシュバックする。

が、蒼衣はすぐに我に返つた。

自分を直視する相手の目に、蒼衣は昔の自分を思い出したのだ。

「俺は退屈で仕方ない。前線へ行けないのはかなりの苦痛だ。お前もそう思はないか?」

ふつ

斗希の発言に思わず溜息がでてしまつ。

「別に、そんなことないけどな」
呆れたように言つ。

しかしその表情は穏やかだ。

それに納得できなのは斗希である。

「お前は俺よりいくらかいいさ。前線とはいかないまでも、スリルが味わえる。それに伽羅^{スライター}もいるしな。全く俺とコンビを解消したのが間違いだつたんだ」

少々ムキになつてゐるようだ。

不満そうな顔をしている。

蒼衣はそんな斗希を見て軽く微笑んだ。

「二人で前線にいたときは確かに楽しかつた気もする。…いや、楽しきつて表現は適切じゃないな。言うなら、今以上のスリルがあつた。俺もそう思うよ。でも、これでいいんじゃないか？」

蒼衣はどこか遠くを見ながらそう言つた。

16歳にしては大人びた横顔だ。

「甘いな。ずいぶんと、甘い…」

まだまだ不服そうな斗希だ。

そんな相手の様子に、蒼衣は声をあげて笑つた。

「別に俺は甘くつたつていいよ。それだけ人間に戻つてきてくれるってことだろ」

「お前がそれでいいなら構わないが、それが命取りになることもあるんだぞ？俺達は一般世界では生きていけないんだからな」

念を押すように言つ。

「…分かつてる。分かつてるよ…」

蒼衣は呟くようにそう言つた。

そして少年達の真夜中の会話は途絶えたのだった…。

翌朝、一番に目覚めたのは螢だった。

軽い気だるさの中でキッチンへ足を運ぶ。

バコッ

「えーと」

冷蔵庫の中をのぞくと、先ず真っ先に牛乳パックに手を伸ばす。そして次に玉子に手を伸ばした。

落とさないようにそつと運ぶと、調理台の上へ3つの玉子を置く。開けられた冷蔵庫のドアは勝手に閉まってしまった。

蚩はいつものようにコップに並々と牛乳を注いで、ぐいっと飲み干していく。

朝からいい飲みっぷりだ。

そしてトンとコップをカウンターに置くと、何となく朝の仕度を始めた。

15歳の蚩が得意とするのは、基本中の基本である玉子料理だ。眠っている一人を起こさないよう、静かに作り始める。

（昨日伽羅起きてたみたいだけど、大丈夫だったのかな…）

蚩はずつと気にしていたのだ。

目の前で事の全てを見ていたのだから当然といえば当然だ。やはり何度も見ても慣れないものである。

冷静にならなければいけないのに、慌ててしまつ。

昨日もそうだった。

蒼衣の携帯番号を呼び出し連絡することさえ、手元が狂つてなかなか出来なかつたのだ。

（いい加減慣れなきやしそうがねーよな、俺も）

蚩は心の中で呟いた。

がしかし、蚩はまだ中学3年である。

普通ならばそつそつ冷静になれる状況ではない、無理もないのだ。けれど蒼衣の姿をずっと見てきたせいだろう。

いつのまにか自分もしつかりしなきやいけないと想い始めていたのだ。

カバツ

器用な手つきで殻が割られ、中身が落とされる。

玉子はフライパンの上でおいしそうに音を立て始めた。

パタン

その頃蒼衣が部屋から出でてきた。

「おはよー、もうすぐメシ出来るよ」

「おはよー、サンキュー。今日はすいぶん早いな

微笑んで蒼衣が言つ。

「蒼衣こそ。寝たの四時じろだろ？ まだ六時半だし、もう少し寝てればいいのに」

「いや、大丈夫だよ。どうせ今日は学校休むつもりだし」

そう言つと蒼衣は新聞を取りに玄関へ姿を消した。

蚩はカウンター越しに蒼衣の背中を見送る。

「ミッションのことで何かあつたのか？」

コトリ

皿を並べながら蚩が問う。

「いや、俺のほうは何もなかつたが……、少し気になることがあるんだ。それを調べに本部へいくつてくれるよ」

蒼衣が答えると、蚩は「やつか」とうなずいて再びキッチンへ戻つていつた。

そのキッチンから食器の音が聞こえてくる。

蚩は手際よく準備しているらしかつた。

その様子を見て、蒼衣は立ち上がり伽羅の部屋へ行く。

念のため、伽羅を起こしにいつたのだ。

伽羅も蒼衣と同じ高校一年で、同じ学校に通つてている。

仕事がないときは必ず学校へいくことをモットーとしている伽羅は、例えケガをしていても、一応いくかどうか聞いておかないと、あとで大変なのである。

「伽羅」

とりあえず蒼衣は声をかけた。

ひどく静かで綺麗な寝顔である。

安心して眠つている。

こうなると起こすのも少し可哀想なのだが。

起きる気配はない。

「伽羅、朝だぞ。起きられるか？」

蒼衣はもう一度、声をかけてみた。

しかし反応はない。

ふう

微笑みと共に溜息もこぼれた。

「学校どうするんだ？ 行くか？ 休むか？」

「つ！ 行くつ！」

がばつ

瞬時伽羅はものすじに勢いで飛び起きた。

「…おはよ。じゃあゆっくり支度しろよ

蒼衣は優しくてついつい言つて、パタンと静かにドアを閉め、出て行つた。やれやれだ。

学校のことを口にすれば必ず起きると思つてやつたことだが、つづく裏切らない奴である。

しつかりはまつてくれた。

「伽羅起きた？」

笑つて蛍が問う。

どうやら伽羅の声が聞こえたらしい。

「ああ、学校も行くつて言つてるよ

「寝てろとは言わなかつたんだ？」

「はは。まあ言つても聞きやしないだろつから

苦笑混じりに蒼衣はそう言つた。

そしてテーブルの上を見ると、すっかり朝食の用意が整つていた。

一人だけで先に朝食を食べ始める。

すると蛍が口を開いた。

「あのや、昨日の事だけど、俺あんまり氣にしてないから。追求もしない。そりや全然気になつてないワケないけど、でも蒼衣はいつも嘘なんていわないので。だから蒼衣が話せる時が来るまで、待つてるよ」

そう言つた蛍の表情はいつも明るさに満ちていた。

それを見て蒼衣も内心ほっとする。

「分かった、ありがとう」

「うん」「うん

蛍は満足そうにうなずいた。

それからすぐに制服に着替えた伽羅が機嫌よくやつてきた。
どうやら腕を吊っていた布は巻けなかつたようだ。

蒼衣はすぐにそれに気付き、伽羅の肩から腕に布をかけて、怪我した腕を吊れるようにしてやる。

「ありがとう、一人じゃ出来なかつたんだ」

伽羅は言う。

「そういう時は言えよ。何でも一人でやるのとすると、怪我の治りが遅くなる」「はーい

伽羅は何故かご機嫌だ。

「あれ？ そういうえは蒼衣、まだ着替えてないの？」

「今日はちょっと用事があるから、自主休校」「え？…

一瞬だけ伽羅が不安そうな顔を見せる。

「どうかした？」

蛍が問うと

「ううん、何でもないよ。いただきます」

そう言つて、いつも通り朝食を食べ始めた。

この時既に事は始まつていたのだ。

小さな歯車の破片かけらがほころび始める。

太陽は窓から光を流し込んだ。

そして少年達の心は揺れる。

重い鉛の形となつて……。

午前9時、蒼衣は既に本部ビルに到着していた。
自動ドアを通り抜けると、一見エレベーターのドアのようなどこか
へ立つ。

すると、ピーと電子音が鳴り、扉が開くと、蒼衣は中へ入った。
「虹彩一致。声紋を照合します。お名前をどうぞ」
電子音が告げる。

「新堂蒼衣」

「コードナンバーをどうぞ」

「1985415」

「シーケレットコード01 声紋及びコードナンバー一致。目的地
をどうぞ」

「総合検索室」

「了解」

「イーン

扉が閉まり、エレベーターが動き出す。

このエレベーターは侵入者を防ぐために作られたのだ。

電子音に従い答え、全て一致すると目的地を告げるだけで、その部
屋があるフロアまで連れて行ってくれる。
便利なものだ。

「到着しました」

「プシュー」

電子音が告げると扉が開いた。

蒼衣は真っ直ぐ目的地へ向かう。

「蒼衣君？」

背後から声が呼びかけた。

「あ、白川さん！ 昨夜はありがとうございました」

蒼衣がそう言つと、蒼衣を呼び止めた秀麗な人物、白川麗はにっこ

りと微笑んだ。

そう、昨夜ワゴン車で駆けつけてくれた人物である。

「R・N」では男として生きている。

しかし実は女性であることを、蒼衣は知っていた。だが本物の男性よりもかつこいいため、周囲に女性であるといつことはばれていなかった。

麗は書類を抱えながら蒼衣と歩き出した。

「総合検索室？」

麗が問う。

「はい、ちょっと気になることがあって」

「それは伽羅ちゃんのことかい？」

そう問われ、蒼衣は黙つとうなずいた。

「そうか…。そういえば、もう斗希君には会った？」

「いえ、別に用もないし」

そう答えると麗は苦笑した。

相変わらずな一人だと思う。

ずっと以前もこんな感じだつた。

それは一人が前線を退いた今も変わっていないようだ。

同じ関係や距離はずつと保たれている。

そんな感じが麗には嬉しかった。

「君達は変わらないな。嬉しいよ、君達の関係が切れていなくて」

麗は優しく言う。

その言葉は蒼衣にとって、嬉しい言葉だ。

「斗希の奴、ずいぶん退屈してるみたいですね。グチつてましたよ」「だらうな」

そう言ってクスクスと麗は笑う。

そんな表情はどこか穏やかで、蒼衣の記憶で立つた一コマだけ残つてゐる母親にどこか似ている。

もちろん記憶に残つてゐる母親の顔と似ているわけではない。空気が似ているのだ。

「それじゃあ私はこっちだから。気になる芽は今のうちに摘んでおいた方がいい。じゃあ」

そう言って颯爽と立ち去つていく。

その後姿を蒼衣は見送った。

（かつこいいよな…）

思わずそう思つてしまつ。

そんな自分に苦笑して、蒼衣は再び歩き出した。

そして検索室へ入つて行く。

中にはいくつものコンピュータが並んでいた。

しかしそこには座らず、さらにその奥に見える扉の方へ入つて行く。扉の横にある数字盤にシークレットナンバーを打ち込むと、ガチャリと取つ手の鍵が開かれた。

この部屋は限られた者だけが入れる場所なのだ。

「R - N」本部にある上層部のコンピュータに直接アクセスできるのである。

蒼衣はその部屋に入ると、一番奥にあるコンピュータの前に座つた。席には「1985415」と書いてある。

そう、蒼衣のコードナンバーだ。

どうやら席は指定になつてゐるらしい。

蒼衣はすぐにアクセスし、伽羅たちの今回のターゲットに関する資料を引き出した。

今回蒼衣は別に指令^{オーダー}が来ていた為、伽羅たちのミッションについては何の関知もしていなかつたのだ。その上もちろん現場にも居合わせていない。

伽羅の負傷を聞いて駆けつけはしたものの、それどころではなかつたから、死体の顔を確認することも出来なかつた。

資料を見るだけならマンションについても出来たのだが、伽羅に疑問を抱かせないためにここへ来たのである。今回は慎重すぎるくらいがちょうどいいのだ。

それに虽と伽羅はいつものように仕事を分担して行つていた。

ターゲット 標的たちの顔の確認は蛍が^{おこな}行つたはずだ。

顔写真の資料は恐らく蛍が持つている。

もし伽羅が気絶したし理由が標的達だとすれば、伽羅が知らずにいたのもうなづける。

蒼衣は慣れた早い手つきでコンピュータの画面をぐるぐる変えていく。

タンツ

一度マウスをクリックした。

そこで手が止まる。

「あつた…っ！」

ディスプレイには見覚えのある顔が一つ、映っていた。

「田所…？」

聞き覚えのない苗字に変わっている。

確か3年前に伽羅を助けた時は「斎藤」だつたはずだ。

その時は別の人物が標的だつたせいで、この人物には一足先に逃げられていたのである。

恐らく田所は、あの時の標的だつた組織の中でもトップの方にいた人物だ。

しかし考えてみればおかしな話だ。

なぜ「R-Z」は3年もの間この人物を生かしておいたのだろうか。まさか伽羅に知らず知らずのうちに復讐^レをさせようとも思つていたのだろうか。

しかし指令は伽羅達の所へきたのだ。

偶然と思える人選ではない。

どちらにしても、もうこの人物は「暗殺」された。

が、問題が一つ残つている。

もしかしたらこの人物が、伽羅の存在を誰かに伝えてしまつたかもしない。

これは簡単に片付きそうなヤマではない。

組織ぐるみだ。

厄介なことになりそうである。

蒼衣は椅子の背もたれに寄り掛かり、ふと伽羅のことを思い出した。今ごろ伽羅は何をしているのだろう。

傷は痛んでいないだろうか。

蒼衣が伽羅に出会ったのは3年前、伽羅を助け出した時である。あれから蒼衣はいつも伽羅の近くにいた。

伽羅が訓練生になつてからも、時々様子を見に行つていた。そして本来ならばランクの違う「狩る者」^{ハンタ} 同士ではチームを組むことが出来ない中で、蒼衣は「現場教官」として伽羅と蛍の二人でチームを組み、今に至る。

「R・Z」組織内ではハンターはSランク→Bランクに分けられ、蒼衣はSランク、伽羅と蛍はBランクに属していて、本来ならば蒼衣は伽羅達とは違う特別な世界にいた。

そしてその扱いもまた特別だ。

しかし、だからこそこうして適当な理由をつけて同じチームにいられるのだが。

それもSランクハンターにだけ与えられた特権というやつである。蒼衣はSランクハンターとして、前線ではないが、時々個人的な指令も受けていた。

今回もそうだ。

伽羅達とは別に、個人的な指令を受け、任務を遂行していた。その間に、事件は起きていた。

蛍も伽羅も、もう新人の域は脱している。だから蒼衣は一人に任せたのだ。

ところが。

誰も予想などしていなかつた。

3年前、あの事件に黒幕がいることは知つていた。

しかし、R・Zの上層部はその黒幕「暗殺」指令までは出さなかつたのだ。

まだあの時点では早すぎたのだ。

それが今、また新たな事件を引き起こしている…。

このままもし黒幕が動き出せば、伽羅が危ない。

これは恐らく伽羅たちのランクで片付けられるような事件ではないはずだ。

片付けられるとすれば、今前線にいるハンターぐらいだろう。

でも。

それも危うい。

今現在蒼衣たちの後任で前線にいるハンターはいないのではないか。蒼衣の記憶には後任が就いたという知らせはなかつたと思つ。

R - Nはどうするのだろう。

もし伽羅の存在が表に出てしまえば、組織としての存続自体危ぶまれる。

そんな馬鹿なこと、R - Nが許すはずないとは思つけれど。以前よりずつと平穏な日々が、少しずつ変化している。

蒼衣は薄々感じていた。

もしかしたら、もうすぐこの日々が壊れしていく…。

蒼衣の不安は積もるばかりだった。

その頃、伽羅は数学の授業を受けていた。

しかし神経は別のところに集中している。

ハタから見れば真剣に授業を受けているように見えるため、教壇に立ち説明を続いている教師が伽羅を注意する事はない。

おかげで心はすっかり昨日の出来事に集中していた。

あの「赤い景色」のことである。

真っ赤な景色の中で、黒い影がいくつも動く。

それもはつきりした影ではなく、ぼんやりとした影だ。

あの時伽羅は言い知れぬ恐怖の中にいた。

気付くとどこからか蒼衣の声がした。

だから伽羅は必死に蒼衣の手をつかんだ。

けれど。

その前の記憶が問題だ。

自分は一体いつ気を失つたのだろう。

ミッション開始は午前一時。

茧と伽羅は倉庫内の物陰に隠れていた。

倉庫の扉が開き、茧が暗視スコープで標的の顔を確認すると、二人はすぐさま動き出した。

訓練生を終えて2年の茧と伽羅の元に来る指令はBランクの仕事である。

そうそう難しいものではない。

二人の動きは迅速だつた。

あつという間にその場にいた標的たちを倒し、伽羅が最後の一人を仕留めようとした時、その時…。

伽羅の記憶はそこで途切れていった。

全く、思い出せない。

最後に倒そうとした標的の顔も、ぼやけていてはつきりしない。

そして伽羅は夢の中にいて、目を覚ますと自分の部屋にいて、リビングへ行くと蒼衣が起きていてくれた。

夢の中にいた自分は、確かに小学生ぐらいだったような気がする。何故あの景色の中で自分は幼くなつていたのだろう。

そういえば、R - Zに入つてからの記憶も、初めの頃はあやふやだ。はつきり思い出せるのは、訓練生になつた頃からである。

その前は。

はつきり思い出せない。

どうしてR - Zに入つたのかも覚えていない。

ただ覚えているのは、自分には人の心を読んでしまつ不思議な力があつたことだけだ。

自分はずいぶん変な力を持つていてると思つていたが、蒼衣はもっとすごかつた。

心が読めるだけでなく、念動力なんぞという力まで持つていた。それを知つてだいぶ心が楽になれたことも覚えている。

しかし、12歳ごろの記憶は何度やっても思い出せない。

そういうえば、蒼衣と出会ったのもいつだつただろう。

自分が訓練生だった頃、すでに蒼衣とは仲が良かつた。

すでに訓練生を卒業していた蒼衣は、時々顔を出してはよく伽羅の訓練に付き合つてくれていた。

そうだ、自分の中にある記憶にはいつのまにか蒼衣がいて、気が付くと自分はR-Zにいた。

蒼衣との出会いも覚えていない。

となれば、蒼衣と出会ったのは13歳より前ということになる。

しかしそ他の全ての記憶がないのに、何故蒼衣の事は覚えていたのだろうか。

それとも、あの頃何度も顔を合わせていたから、どれが出会いだつたか忘れてしまっているのだろうか。

大切な人の事なのに、何故こんなにも記憶はあやふやなのだろう。思い出そうとすればするほど、考えれば考えるほど伽羅の気持ちは沈んでいく。

これも久々にした大ケガのせいだろうか。

ふつと伽羅は右腕を見やつた。

「伽羅、腕痛むの？」

「！？」

友人の声に驚き、伽羅は顔を上げた。

そこには安心できる笑顔だ。

伽羅の親友、水上奈緒である。

「もう授業終わつてるよ。でも伽羅全然動かないから……」

「ごめん、考え事してた。傷は痛まないから大丈夫」

そう言つて伽羅は苦笑する。

「元気ないね」

奈緒は空いていた隣の席に腰掛けた。

唯一無二のこの親友は、詳しい事は分からなくともその様子は全てお見通しだ。

考え事もずい分深刻だとすぐに分かる。

「伽羅、溜め込んじゃダメだよ？ 私じゃなくても、誰にでもいいから話せる人に話したほうがいいと思うんだ」

「うん…」

伽羅はうなずく。

決して押し付けがましい言い方をしない奈緒の優しさが心に響く。しかしその優しさが苦しい。

全てを明かすわけにはいかないから、話すとなれば向こう側の見えない不透明な話を聞かせることになってしまつ。

例えそれでも奈緒は自分の事のようになにきちんと聞いてくれるだろう。でもそれではどこか奈緒を裏切つているように感じてしまうのだ。話せない。

そんな事を考えている伽羅を見ていた奈緒は、

「伽羅の場合話せない、のかな」

そう言った。

びくつ

伽羅は奈緒の言葉に目を丸くした。

しかし奈緒は笑顔である。

「大体想像は付くよ。話せない、って言つのは話したいけど話せない、ってことでしょ？だから話せない事は話さなくてもいいんだよ。無理に話そうとすると余計苦しくなっちゃうから」

「奈緒…」

心の奥が締め付けられる。

「今日の伽羅は少し弱つてゐるのかな？ 気晴らしに買い物でも行く？ もちろん放課後だよ」

奈緒は伽羅の顔を覗き込んだ。

出そうになる涙を、伽羅はぐっと堪える。

「奈緒、ありがと」

「ん？ どういたしまして。放課後になつたら『パート行こうね』

「うん」

「荷物はコインロッカーに入れて、買った物は私が持つから伽羅は遠慮しないでね」

「うん」

「大丈夫、伽羅は一人じゃないから」

「うん」

伽羅は嬉しそうにうなずいて笑った。

何故だろう。

奈緒の言葉はこんなにも自分を楽にしててくれる。
確かに自分は今一人ではない。

蒼衣も螢も、そして奈緒もいてくれる。

しかし、やはりこのあやふやな記憶が気になる。
疑い始めると自分の名前すら疑いたくなるのだ。
本当に自分の名前は「伽羅」なのだろうか。

伽羅の中に芽生えた疑問は消えはしなかつた。

あれからすぐに総合検索室を出た蒼衣は本部ビル内を歩いていた。
他に何の目的もないが、もしかしたら斗希に会えるかもしれないと思つていたのだ。

ただし、奴にその暇があればの話だが。

「お前も忙しい奴だな、蒼衣」

「斗希！？」

驚いた蒼衣は声のしたほうを向いた。

本当に斗希という奴は神出鬼没だ。

一体いつから待ち伏せていたのだろう。

「お前はずいぶん、暇そつだな」

蒼衣はそう言つてやつた。

「暇とは失礼な。これでも仕事は朝から晩まで詰まりっぱなしだ。

次にこの仕事につく奴が気の毒だ」

斗希は余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）でそう言い放つた。

「斗希、次つて…もう後任は決まつてゐるのか？」

蒼衣が問う。

そう、先が見えていなければ「次」などとは言えないはずだ。
しかもこの余裕だ、そう遠いことではないらしい。

「相変わらずいい読みだ。もちろん後任はすでに決まっている。今は引継ぎ中だ」

「それならお前の次の仕事は?」

「何気なく聞いた間に、

「最前線だ」

斗希は鋭い視線を向けてそう答えた。

瞬時蒼衣の表情が変わる。

斗希がここで待ち伏せていたのはそれを告げるためだった。

蒼衣が来ている事を知っていたのだ。

「俺は最前線へ行く。いや、戻ると言つた方が正しいか

「上からの命令か?」

「他にどこから命令が来る?」

「…」

蒼衣は少しの間黙り込んだ。

しかし

「良かつたな。これで退屈じやなくなるだろ」

無理矢理作った笑顔でそう言つた。

内心は信じられないままだ。

もしかしたら自分も…、それを考えてしまう。

けれど斗希から出た言葉は、蒼衣の気持ちを裏切ってはくれなかつた。

「他人事ではない。前線へ行くのはお前と俺の二人だ…」

お前と俺の二人…その言葉が耳の奥で響き続ける。

斗希は蒼衣の様子をじっと見つめていた。

「何故俺達が前線から外されたか分かるか?」

静かに斗希が問う。

「俺達に落ち度は一つもなかつた、俺達が不必要になつたからでは

ない。むしろその逆。俺達の力を蓄えるために前線から外したんだ。3年という時間はその為に充分だった。これ以上Aランク指令オーダーに甘んじてはいることはない。そのうち上から呼び出しがかかるだろ？」斗希の言葉を蒼衣はじつと聞いていた。

「お前は、前線へ行くのが嫌なのか？」

「いや、そうじゃないけど……」

「一般社会に多少の夢を見た、か

「……」

違う。

夢を見ることなどとつぐに忘れた。

夢を見ていろいろほど、この世界は甘くない。

それは蒼衣も分かっている。

何故前線から外されたのかも、薄々分かっていた。

あの頃の自分には能力の低下などはなく、むしろ調子は良かつた。しかしやはり3年という時間は長すぎたようだ。

Aランク指令はSランク程ハードではない。

それでもBランクと比べればその差は歴然だ。

例え指令のランクが下がろうとも、自分はSランクハンターに属したまま、相変わらず裏の世界で生きている。

しかし前線にいた頃に比べればずっと穏やかだ。

そして蒼衣の周りにはいつも伽羅と螢がいる。

斗希と同じよう大切に仲間だ。

けれどその感情が危険なことも知つていて。

R-Zは生き残ることが第一なのだ。

パートナーはお互いの暴走を止めるためのものであつて、仲間意識を育てるものではない。

それは分かつていて。

「お前は前線へ行くのが嫌なのか？」

もう一度、斗希は問う。

「嫌、別に行きたくないわけじゃないさ。ただ自分でもわからない。

3年は…長すぎたかもな

そつ言つて蒼衣は黙り、近くにあつたソファに腰を下ろした。

その隣へ斗希も座る。

あの頃よりもずっと平和で穏やかな日常…確かに蒼衣は漫つていた。中学、高校に通い少なくとも昼間は表の世界に生きてている。しかしそれは表面的なものだ。

本当の日常は奥深くに隠れている。

表の世界を夢見ても、全てを手に入れる事は出来ない。もうとつぐの昔に解っていたはずだ。

なのに何故、こんなにも今ショックを受けているのだろう。昔の自分なら、こんなショックは受けなかつただろう。元気がのらないならやめた方がいい、失敗するぞ

斗希はそう言つた。

言葉は冷たいが、決して突き放しているような口調ではない。

失敗の先にあるのは「死」のみなのだ。

それも前線となれば必至である。

解っているのだ、蒼衣も。

そして斗希の真意も分かつている。

「お前に迷惑はかけない。けどさ、純粋にスリルなんて楽しめるか？」俺もお前も

小さく微笑む。

そんな蒼衣を斗希はスッと見つめた。

「そつか？俺は退屈だった分、存分に楽しませでもらうが

「なら、いいかもな」

「…昔に戻ればいいことだ。銃を持ってばすぐに思い出すんだろう？^{ガン}今だって。いいか、俺達はレッド・ゾーンのぎりぎり一歩手前で生きている。完全な闇だ」

斗希の言葉はずしりと響く。

すると蒼衣は静かに笑つた。

「こまさら白になれるわけないだろ」

「分かつてゐるじゃないか。だつたら躊躇つ理由はビリにもない。そ
うだろ？」「

「ああ、…けど俺だつて人間だ。躊躇つことがあつてもおかしくな
いだろ？」「

蒼衣はうつむいてそう言つた。

「人間？ぐだらない情は捨てた方がいい

「え？」「

「情を持つたままだとお前はいつか壊れる」

斗希の視線が蒼衣の心を射通すかのように冷たく刺さつた。

「お前は前線を退きあの一人とパートナーを組んだことで仲間を得
た。しかしそれと同時にぐだらん仲間意識が芽生えた。あの一人を
お前が守らなければいけない法なんてどこにもないのに、だ」

「それじゃ仲間を、パートナーを見捨てろりつてことか？」

蒼衣は声を殺したようにそう言つた。

斗希の視線を直視できない。

「俺達は昔の忍びと同じだ。忍びは任務遂行のためには仲間をも見
捨てる。生き残ることを優先させ、次へつなげるためだ。俺達は生
き残ることを前提に仕事をするんだ。パートナーを組むのは、暴走
を防ぐためであつて馴れ合うためでも仲間意識を育てるためでもな
い。この世界はそんな生易しいところじやないぞ」

斗希は始終冷静な口調でそう言つた。

仲間やパートナーのいる理由は蒼衣も充分分かつてゐる。
しかしそこには割り切れない何かがあつた。

「斗希…お前はそつやつて全ての事を割り切つていけんのか？生活
自体に裏表があつて、その仲で葛藤とかないのか？仕事といえど俺
達は一瞬でなんの躊躇いもなく人を殺すんだぞ？そんな自分が表に
立つた時、明らかに周りとは違つこと、嫌でも感じるだろ？
いつになく激しい口調だつた。

自分の中の裏と表。

心の中の葛藤は消えない。

一人の間には重い沈黙が訪れた。

静寂にも似た長く重い沈黙。

それを破つたのは斗希の一言だった。

「甘いな」

そう言つて斗希が立ち上がる。

それにつられて蒼衣も顔を上げた。

「裏に身を置くから表が辛い。表があるから余計な葛藤が生じる。

そしてお前は壊れる」

「何だよそれ…」

「本当のことだらう？ そしてお前が壊れればお前のパートナーはもうく崩れる。それならいつそのこと表を捨てて裏へ来たらどうだ？」
斗希は静かにそう言つた。

蒼衣には斗希に返す言葉が見つからない。

まるで大人にたしなめられている子供のような気分である。
「正式な命令が来るまでにまだ時間がある。割り切れないのなら今
のうちに一人を自分から切り離すことだ。そうすれば先ず最悪の事
態は避けられる」

「同じことだらう？ あの二人を切り離してもお前がいる」

「俺のことは気にしなきやいい」

「そんなことできるわけないだろ？」

苦しさで声が詰まる。

蒼衣にはどんなことをしても斗希のよつに割り切ることは出来ない
のだ。

「蒼衣、少し冷静になれ。今のお前じゃ前線へ行つても殺られるだ
けだ。使い物にならない」

斗希にそう言われて、蒼衣の様子も少しづつ変わっていく。
少しだけ落ち着いたようだ。

「俺達は生き残ることを優先させるといつただらう？ それは一人よ
りも一人で生き残れる方がいい。パートナーはそのためでもある。
俺達と忍びは似て非なるものだ」

「…？それって、お互いを助けるためってことか？」

「そうだ。ただしそれにはお互いの高い能力が必要とされる。どちらかが劣つていれば不可能だ。つまり、俺と組むことに至つては一人で助かることも可能だ。が」

「あの二人とでは、三人で生き残ることは難しい…」

「ああ」

落ち着いて呟いた蒼衣に、斗希は静かにうなずいた。

「俺達は誰かがやらなきゃいけないことをやつしているだけだ。蒼衣、相手への情は捨てる。相手への情がある限り、お前の中の罪悪感は消えない」

どこか温かい斗希の声。

伽羅も螢も蒼衣にとつて大切な仲間だ。

蒼衣の居場所は確実にそこにある。

けれどあの二人にはまだ蒼衣を100パーセント理解する事が出来ない。

斗希なら自分の事のように分かつてしまつことでも。そう、戻るだけだ。

昔に戻るだけのことなのだ。

蒼衣の居場所はここにもある。

「斗希、正式に指令が来たらすぐここからちへ移る。手配は頼んだ…パーティ一は解消だ…」

とても落ち着いた安堵の顔でそう言った。

傷を負つた伽羅の事も気がかりだし、まだまだ子供の螢も心配だ。しかし。

道が変わる、とてつもなく大きくて、とてつもなく小さな交差点。

蒼衣は向こう側へ渡る信号を青に変えた。

もう戻れない。

信号は赤に変わる。

もう…戻れなくていい。

蒼衣の言葉に、斗希はそつかとうなずいた。

そして蒼衣の元に前線行きの指令が下ったのは、それから一週間後のことだった。

Stage 3

すっかり片付けられた部屋の扉をパタンと閉めた。
もう帰ることはないかもしれない。

荷物はすでに移してある。

後は蒼衣が行くだけだ。

外では斗希が待っている。

「蒼衣…」

蒼衣は振り向いた。

見ると伽羅が後ろに立っている。

そのまた後ろには螢だ。

「螢、これからもがんばれよ。焦ることなんかない、少しずつ成長
すればいい」

「うん…。蒼衣、絶対いつか追いついてみせるよ、俺」

明るく笑ってそう言つ。

「待つてるよ」

蒼衣は一つ微笑んで見せた。

そして伽羅のほうへ向き直る。

伽羅は心細そうな瞳めで蒼衣を見つめていた。

「傷、大丈夫か？」

「うん。もう平氣」

「学校は？」

「大丈夫」

「…」

何をどう言えばいいか分からぬ。

蒼衣の頭の中をいくつもの言葉がぐるぐると回り始める。

「蒼衣」

いつもより少し高い声で伽羅が呼びかけた。

「一つだけ約束して？」

「ん？」

「死なないで。絶対」

真っ直ぐ、ただ蒼衣だけを伽羅は見つめる。

「ああ、死なないよ俺は。そうカンタンに死ぬわけないだろ？」

そう言ひつと、ぎゅっと伽羅を抱き寄せた。

「私、大丈夫だよ。一人じゃないからがんばっていける。学校でも今まで通りでいられる。信じてるから、私がんばる。…また、会えるよね？」

「会えるよ、どこかで」

「うん…。またね」

「うん」

そう言ひて一人は離れると、蒼衣は少しだけ微笑んで玄関を出ていった。

振り返らず、伽羅の一筋の涙を見ないように。

階段を駆け下りると、斗希が黙つて待っていた。

腕を組んで、いつものように。

そしてその横には以前斗希と蒼衣の補佐役サポートをしていた山神信司の姿もある。

山神は薄茶色のスーツを着こなしていた。

長身にそのスーツがぴたりと似合ひ。

3年ぶりに復活するのだ。

R - Z きつての天才コンビ、そしてその二人をサポートしてきた有サ能ボタ補佐役。

3人は車に乗り込んだ。

山神が車を発進させる。

「もう覚悟はいいのか？」

「ああ、この一週間で全部ビリにかした」

蒼衣はほんの少し苦笑する。

運転席では山神が静かに一人の会話を聞いていた。

けれど斗希と蒼衣の間にも沈黙が訪れる。

元々放つておいてもうるさいくらいに話をするようなコンビではなかつた、山神はそんな事を思い出す。

確かにコンビを組んだ当初は一人とも全く会話がないといつてもいいくらい、何も話さなかつた。

それでいて何故かばつちり息が合つていたのだが。
すっかり車内は静まり返つてしまつた。

蒼衣の中では何度も伽羅と螢の姿が蘇る。
仲間は馴れ合つたためのものではない。

情を育てるためのものでもない。

生き残るための術。

それは分かつてゐる。

けれどこの辛さは割り切つていけるものばかりではないことの証拠だ。

どうしても割り切ることが出来ない。

そこまで冷酷な人間にはなれない。

自分が生き残るために見捨てる、そんな存在には出来ない。

「また難しいことを考え込んでいるのか？」

斗希が問う。

「俺には難しいな。どうにかしたつて言つたつて、そうカンタンに割り切れない」

「割り切る必要もないだろう」

運転席の方から声がした。
山神だ。

山神だ。

「例えば紅橋君たちだ。彼らは助け合つて生き残るタイプだ。決してお互いを見殺しにはしないだろうな」

「あれは例外だと思うが？」

斗希が言つ。

紅橋、とは雪乃のことである。

確かにそう言えない事もない、蒼衣は心の中でもうなづく。

山神は苦笑していた。

「例外かもしないけど、R - Zは例外で成り立つてるようなものだからな。それに何だかんだ言つても君だつて、土壇場になれば蒼衣君を助けようとするだろ?」

斗希の方をちらりと見て山神が言つ。

「お互い助かる可能性があるからだ」

口ごもりながら斗希も反論する。

「可能性はあくまでも可能性だ。確実なものはないだろ? それでも君は蒼衣君を助ける」

という山神に、斗希はぐつと詰まつた。

「まあ、 そうは言つても可能性つていうのは大切なからな。 可能性がなければ助けない、か」

「万が一にも可能性が0になることはない。だから俺は蒼衣を助ける」

その自信はどこからくるのか分からぬいが、自身満々でそう言つた。

二人のやり取りにどこか安堵する。

「人間なんだ、情なんて自然と生まれる。その中でいつも試される。かたくなにオキテを守ろうと勤めるのも一つかもしれない、生き残るためにね。けどそんな事は大して重要じゃないんだ」

「どうしてですか?」

蒼衣が問う。

「万に一つも君たちが失敗することは有り得ないからだよ」
これまた自信満万に山神は言った。

斗希も山神も、その自信の根拠はどこにあるのだろう。

「君達には絶対の信頼があるからね、そうじゃなかつたら君達の能力を温存したり、また最前線に戻したりなんてしないよ。それに君達は何のために僕達がいるか知つてるかい? サポート」

その問いに、後部座席の一人は黙る。

補佐役については二人ともよく知らないのだ。
ただの雑用でないことがぐらいは想像もつくが。

「補佐役は命を賭けてでも狩る者ハンターを守るという役目があるんだよ」

「え？」

「驚いてるようだね。無理もないか」

「そう言つて苦笑する。

「R・Zは厳しいところだ。それは君達にも分かるだらう。けどまだ君達はRED・ZONEの一歩手前にいるんだ。ギリギリのところだね」

「最前線であつてもですか？」

「そう。本当のRED・ZONEは補佐役を必要としなくなつてからだよ。普通なら僕や白川君のように大人になつてからだけど、君達はもつと早いな。このままいけば一年以内に僕は必要なくなる。そうなれば僕はデスクワークのみの補佐役になれる」

山神はどこか嬉しそうにそう言つた。

蒼衣と斗希は顔を見合わせる。

今まで知らなかつたことばかりだ。

もつとも、今まで自分達が幼すぎて、自分達を取り囲む大人たちの事情なんてどうでも良かつた。

しかし補佐役に、そんな使命があつたとは。

「R・Zで生き残るには、どんなことがあつても生きることを諦めない」とだよ。特に君達はね」

「けど…、山神さんの話を聞いてると、あのままパーティーを解消することもなかつたんじゃないかつて思えてくる。割り切る必要がないなら尚更」

蒼衣はそう言つた。

斗希も隣で耳を傾けていた。

「それがそうもないかんだ」

山神の表情が変わる。

今までの和やかさが消えていた。

「今までして君をこちらへ迎えるのはきみと理由があるんだ」

「その理由つて？」

蒼衣は身を乗り出す。

「うん、先ず連絡に不便なんだ、君達一人が離れた場所にいるとね。そして何かとトップ・シークレットが多いから、君達以外に情報を知られると困る。それから、特に蒼衣君、君にかかる精神的負担を余計にかけるわけにはいかないんだ」

「分かるだろ？お前は俺と組むことで最大限に能力を発揮できる。けれどあのままでは他人の分までお前に負担がかかる。そんな状態で最大の力は出せない」

斗希がじつと蒼衣を見据えながらそう言つた。

あのままではそう、伽羅と螢の精神的未熟さが蒼衣に負担をかけてしまう。

図星だ。

そして山神が続ける。

「そして重大な問題が起きた」

「問題？」

蒼衣が問う。

「君に与えられた特権は、ここまでだつて事だ。上層部は今まで君の行動を甘く見ていた。しばらくの間は自由にしておけ、つてね。ところが君達の力が必要になつて、君を自由にさせておくわけにはいかなくなつたんだよ」

「俺達に与えられた特権なんて、そんなものだ」

蒼衣は二人の話を黙つて聞いていた。

Sランクハンターに与えられた、「特権」。

今までではそれに助けられていたと思っていた。でもそれは違う。

「特権」は、上層部の気まぐれだ。

そんな事を考え出した蒼衣を見て、山神は

「全て情報は手に入れられる。伽羅君達の事は気掛かりかもしれないが、少しの間の我慢だよ。いずれ決着がつく」

そう言つた。

「決着？…てことは、もしかして今回の仕事つて…」

「そう、3年前の件を全て片付ける」
はつきりと山神はそう言った。

3年前の件、それは伽羅の両親が殺された事件である。

「赤い景色」として伽羅の記憶に残っている事件だ。

「それならその仕事が終われば俺は」

蒼衣は呟いた。

しかし。

「パーティーを戻すことは無理だ」

「どうして？」

「元々Sランクハンターとそれ以下のハンターでは全く扱いが
別なんだ。本来なら前線を一時退いたとしても、Sランク以外のハ
ンターと組むべきではなかつた。けれど伽羅君も蛍君も特殊能力を
持つていたから、君にその力を育ててもらう必要があつた。でもこ
れは特例だ。君が前線へ戻つたからにはもう世界が違う。接触すら
制限される」

その言葉に蒼衣は言葉を失つた。

ランクは違えど同じハンターだといふのに世界が違うとは。

「心配かい？」

和らいだ声で山神が問う。

山神は蒼衣のことも斗希のことも全てお見通しだ。

何と言つても一人が小学生の頃からずっと、山神は一人を見守つて
きたのだ。

一人の性格はしつかり把握している。

「彼女達の情報なら知ることが出来る。そんなに心配は要らないよ
「それに全く接触してはいけないとは言つていない。制限されるだ
けだ」

斗希が付け足す。

すると、少し蒼衣の心も軽くなる。

「R・Zは一見完璧で、その網からは抜け出せないような気になる
けど、ちゃんと逃げ道はあるんだよ。特にSランクハンターにはそ

れが特権て形になつて表れる。難しく考えない方がいいかもしけないな」

「そつか。それならいいや。だいぶ気分も楽だし、絶望はしなくて済みそうだ」

蒼衣は明るくそう言つと、背もたれに寄りかかつた。
どんなに考へても、やはりすつぱりと割り切ることなんて出来ない。
それでも山神達の言葉で少しあは心に余裕も出来た気がする。
それに今回の仕事を終えれば伽羅の身の安全も保障されるのだ。
とつとと片付けてしまいたい。

蒼衣はそう思った。

サーツ キュツ

シャワーの蛇口を閉める音がして、水の音が止んだ。
付け放しになつてているテレビから流行の歌が聞こえてくる。
時々音程を外す下手な歌声…。
どうしてあんなものが流行るのだろうか。
流行とは怖いものだ。

服を着替えてバスルームを出ると、彼女はすぐ台所へ入つていつた。
紅橋雪乃、そう伽羅の記憶が戻りかけた時助けに来た、あの雪乃である。

今年19の雪乃は、少女のようなあどけなさも消え、整つた顔に細身の体が大人の女性を演出している。

蒼衣がR-Z本部に戻つてから、すでに三日が過ぎていた日の事だった。

ここは雪乃とそのパートナー、渡瀬修一の住むマンションである。
修一は今年23の大人で落ち着いた雰囲気を持つ。
この日雪乃はどうやら一つ仕事をしてきただった。
この一人はAランクに属している。

あらかじめ熱いお湯を通して入れておいたコーヒーを、雪乃はゆっくりカップに注いだ。

部屋中に「コーヒーのビターな香りが漂う。

「ふう。やつぱり仕事の後はシャワーに「コーヒーだわ。まったくやんなつちやう。何で突然あんな指令オーダーが来るのかしら」
グツ

雪乃是ソファに力が抜けたかのように座つた。

「仕方ないな。お前の能力ちからは団体相手にはもつてこいなんだから」

「それはそうなんだけね。でも今回の仕事、本当にAランクなのかしら。全然手応えのない奴らばかりだつたわよ」

「それはお前が強すぎるからだろ?」

修一はそう言って、ゆっくりと分厚い本を閉じる。

雪乃是手に持つていた「コーヒーを一口飲んだ。

「私なんかより強いボーヤ一人がいるじゃない。きっと今頃暇にしてるはずよ?」

「けどなあ、ここでいろいろ言つたつて、そのボーヤ達の力が必要だから、今一人を休ませてお前に仕事を回してるんだろう?仕方ないさ」

「そうだけど、でもつ。もつと手応えのある奴ないのーつ?」

雪乃是絶叫（？）した。

「ないな」

修一がきつぱり言つて、眼鏡のフレームをぐつと押し上げる。

軽い近視なのだ。

「確かにあの子達はもう超一可愛くつて大切だけどおつ。本部が悪いのよ、本部が」

雪乃の怒りのボルテージがひねくれながら上がつていく。

目の中に次第に怒りの炎が現れそうだ。

「本部ねえ…。でもお前はあの一人が好きなんだろ?弟みたいなんだろ?ならいいじゃないか」

腕を組みながら修一が言つ。

「よくない。私は仕事に関しては妥協しないのつ」

「…そんなこと俺達でどうにかできるもんじやないぞ?指令は決め

られてるんだから

「それもそうだけどね。あーあ」

雪乃是クッショוןを抱え込み、顔を埋めた。

これでは見目美しい大人の女性も形無しだ。

そんな様子を眺めている修一は、穏やかに苦笑中である。

「この間からあんまり元気なかつたからな

「んー？」

ゆっくりと雪乃が顔を上げる。

「おまえの元気がなかつた、つて事だよ。じょうがないな、シーフードスパゲティでも作ろうか」

そう言うと修一はカウンターの向こう側へ行き、準備を始めた。収納が下にあるため、修一はしゃがんでいて姿が見えなくなる。雪乃是食器やフライパンが何かにぶつかっている音を聞きながら、台所の方を見つめていた。

どうやら少し疲れているようだ。

表情がボーッとしている。

仕事で雪乃が持つ特殊能力を使つたせいだらう。

どんな能力でも、それを使うと多少体に影響するのだ。

雪乃是ソファの上で膝を抱えて座りだした。

「疲れた」のポーズだ。

それも無意識のうちの癖である。

修一はそれにすぐ気付く。

「雪乃、仮眠しててもいいぞ？夕飯出来たら起こしてやるから

「うーん、いいー」

クッショൺに顔を埋めたまま首を横に振つて雪乃是答えた。

時計は午後7時を指している。

今日はこれからまだもう一つ仕事があるので。

こんなことはめつたにない。

R-Z本部で何かが動き出しているに違いない」とは、雪乃も薄々感じている。

もちろん修一もだ。

雪乃是再び「一ヒーに手を伸ばした。

夜に仕事が入っているときは眠らない方が体は動く。一度眠つてしまふと目もさえない。

雪乃是それを分かつていた。

だから眠らないと言つたのである。

「ねえ修ちゃん、何での二人は組織にいるんだろうね」

雪乃是顔をカウンターの方へ向けてそう問う。

「さあ？でも小学生の時から走り回つてて事は聞いたことがある。あの二人はR-Z内でもトップ・シークレットだから、詳しいことを知つてる奴は少ないぞ。直接コンタクトとれるのは俺達ぐらいだし」

「そうだよね…。それに本来はあの二人Uランクだもんね。私達のいる場所とはまた違う場所にいるんだよね」

「そういうことだな。特にあの二人は特別だ。彼らに『ねえられてる許容範囲は広い』

「だから私達とのコンタクトも許されてる」

雪乃是そう呟いた。

そしてクッショוןを隣へ置くと、台所へ向かつ。

引出しからフォークを一本取り出し、棚から皿を取り出した。その時だった。

ヴィン キー カタカタカタ

オンラインでつながったコンピュータが音を立てた。

雪乃是すぐその前へ行く。

そこに映つたのは他の誰でもない、斗希の姿だつた。

「昼間の分の仕事は片付いてるわよ。事後処理よろしくね」

「ああ、もうすでに処理班が向かつていて。それより明日から俺は次の仕事に移る。これからこの仕事は別の奴が担当するだろう」

「そう、引き継ぎ終わつたのね」

「ああ

「嬉しそうな顔してる。何かあったの？」

雪乃が問う。

しかし斗希はいつもの仏頂面に見えるのだが、ビリヤリ少し表情が違つらしい。

斗希は少し黙り、すぐに口を開いた。

「俺の顔が嬉しそうに見えるのなら、それは恐らく次の仕事のせいだな」

「次の仕事って？」

斗希の回りくどい言い方も、雪乃には分かっている。こんな時は決まってご機嫌なのだ。

そんな一人のやり取りを修一は笑いながら聞いている。

「最前線へ戻る」

斗希は一言そつ言つた。

「え？」

雪乃の表情が変わる。

「まさか一人で、なんてことは有り得ないわよね？」

「当然だ」

「てことは…」

雪乃の中に不安がよぎる。

「まさか蒼衣ちゃんも…？」

「もちろんだ」

その言葉が重く響いた。

雪乃は目を伏せて溜息をつく。

「そう…。もうR-Z本部に戻つてるのね？」

「ああ、日々訓練に励んでいるぞ」

斗希は嬉々として言う。

「パーティ一は解消したつてことよね？」

「当たり前だ」

事も無げに言う。

が、雪乃が何を言いたいのかは分かつっていた。

蒼衣の性格も斗希の性格もよく知っている雪乃は、蒼衣が壊れてしまわないか心配で不安なのだ。

「あまりよさそうな反応じゃないな」

斗希はカマをかける。

「そうね、いろいろ考えると反対だわ。蒼衣ちゃんのことだから、そっちへ行く時詳しい事は何も告げずにパーティーを解消したんでしょう？」

「それが？」

斗希が問い合わせる。

「蒼衣ちゃんとあの一人、本当に離して良かつたのかしら？」

雪乃のトーンが下がる。

「伽羅ちゃんのためにも、離れるべきじゃないんじゃないかしら。彼女の記憶は戻りかけてるわ。もちろんまた封じておいたけど、実は不安要因があるのよ」

「不安要因？」

斗希は眉をひそめる。

「彼女の中にある印象が強すぎたのよ。赤い景色だけがどうしても封じられなかつた。その上心の中でタガが外れたら、もしかしたら少しずつ封じた記憶まで戻つてしまふかもしね。分かるでしょう？彼女の不安を抑えてたのは蒼衣ちゃんなのよ」

「それがどうした？」

斗希の鋭い視線が雪乃を見つめ返す。

雪乃は言葉が出てこない。

そう、斗希に言われて気付いたのか。

R - Nには関係ないのだ。

だからこそ保護していた伽羅を、今ではハンターとして働かせている。

個人の感情など、R - Nには関係ない。

命令は絶対だ。

斗希に何を言ったところで、斗希には何の責任もないのだ。

「『めん、分かってるわ。今のは忘れてちゅうだい』
雪乃は払つように手を動かした。

「分かっていればいいさ。さほど氣にはしていない」
分かっているのだ斗希だつて。

雪乃に悪気はない。

「そう、それならいいわ。でも正直不安よ。心配だわ。もし蒼衣ちゃんが壊れたら、つて考えるとね」

力なく雪乃は笑う。

その中に見え隠れする暗いものを、斗希は見逃さなかつた。

「前線を退いてからの蒼衣ちゃんは、ずいぶん明るかつたわ。見てるこつちが幸せになるくらいね。…反動が大きいんじやないかしら」「そう心配することはない。蒼衣は納得してゐるし、山神さんがうまくメンタルコントロールしているからな」

斗希の口調が柔らかくなる。

「ランクハンターは別世界、ね。少し安心したわ。でも気を付けてよ?一人とも必要以上に無理しないで」

「分かっている。蒼衣にも伝えておこう」

斗希はうなずいた。

「ただし、伽羅ちゃんの事については内緒にね」「当然だ」

斗希の偉そうな態度は年上の雪乃に對しても健在だ。

「俺はすぐ仕事に戻る、じゃあ」

斗希はそう言つと通信を終えた。

ふう、と雪乃は溜息をつく。

すると、てんこ盛りになつたスペゲティを、フライパンごと持つて修一が台所から現れた。

それを丁寧に皿へ移していく。

「相変わらずだな、斗希は」「修一が笑いながら言つ。

雪乃は前髪をかきあげながら席についた。

表情がすっかりお姉さんだ。

「でもさ、放つておけないでしょ？あの二人…ううん、あの子達のこと」

「もちろんだ。放つておけるわけないな。あいつらに一番近くて、頼られてるのは俺達だけなんだから」

修一はいつもの笑顔でそう言った。

皿からはいい匂いが漂つてくる。

雪乃は頬杖をつきながら、修一が盛り付ける様子を見つめていた。

ダンツ

的の真ん中に小さな穴があく。

硝煙の匂いが漂う銃の訓練室、そこに蒼衣はいた。

「雪乃からの伝言だ。必要以上の無理はするな、らしく」

力チャ

斗希がいつのまにか入つてくれる。

蒼衣は耳当てを外した。

「もう少し的を小さくしたらどうだ？」

蒼衣の隣へ立つて、斗希がボヤく。

「別にいいんだよ、一ミリもずれてないし」

ゴト

蒼衣は銃を台の上へ置いた。

「変だよな、いつも使つてゐやつよりもこいつの銃の方が手に馴染むんだ」

「当然だな。お前がこの間まで使つていたのは標準装備に少し改良を加えたものだ。しかしこれは俺達専用に作られた。手に馴染むのも当たり前だ」

「なるほどね」

そう言つて銃をぐるぐる回す。

先刻の一発が最後だつたようだ。

「ところでまだ指令が来てないようだけど、どうなつてるんだ？」

蒼衣が問う。

「さあな。もう俺は関係ないからこりの事は知らん。いずれ来るだろ？」「

かたわらの機械をいじくり、的を動かしながら斗希はそつと云つた。

そしてガタガタと何丁かの銃を取り出す。

「そうだ、すつかり言い忘れていたが、ここにあるのは全て俺達専

用だ、好きなものを使え」

「了解」

蒼衣が答えると、斗希がスッと銃を構えた。

それを横から見つめる。

しかし。

ゴトリと斗希は従をおりした。

「的がでかすぎるな。蒼衣、あれを小さく出来るか?」

そう言つて、蒼衣のほうを見やる。

「は? それって能力使えって事か?」

「もちろんだ」

がくつと蒼衣の肩が落ちる。

やれやれだ。

が、すぐに蒼衣は的を見据えた。

バシュツ

瞬時的に三分の一が吹き飛ぶ。

「いのぐらいでいいんだろ?」

「上出来だな」

満足そうに斗希は言つた。

「お前なあ、能力使つとどうなるか分かってるんだろう?」

じと目で蒼衣が斗希を見る。

しかし斗希には効くはずもなかつた。

「無論。しかしこの程度でバテはしないだろ?」

「…」

確かにそうである。

多少ダルイがバテはしない。

蒼衣は椅子に腰掛けた。

斗希は再び銃を構える。

ダンツ

勢いよく飛び出した銃弾は、小さくなつた的の真ん中を射抜いた。

3年も現場を離れデスクワークをしていたのにこれだ。

ブランクなどお構いなし。
嫌なやつだ。

少しもなまつていないと
やる気のない声援を蒼衣は送る。

「お見事お見事」

「フツ、当然だ」

当然の」とく自信満々。

そして今頃蒼衣は氣付く。

何だ、単に自慢したかつただけなのか、と。
蒼衣はゆっくり立ち上がった。

「俺、帰るぞ。お前どうする?」

「もう少し練習していくさ」

斗希はそう言つとすぐさま構え出した。

それを見て、蒼衣は立ち去る。

もう練習は充分だ。

それよりも指令^{オーダー}が氣になる。
早くケリをつけてやりたい。

蒼衣は部屋に着くとすぐにコンピュータの方へ歩いていった。
数枚の紙がプリンターから出でてきている。

蒼衣はすぐにそれを手にとり読み始めた。

「暗殺^{ハント}」の文字が目に飛び込んだ。

いよいよだ、蒼衣は心中で呟く。

蒼衣の手に力がこめられた。

R - Zビル内の一室、そこに二人の姿があつた。

「芽衣、お前の弟がいよいよ最前線へ戻ったようだな
「知ってるわ」

真つ直ぐ伸びた長い髪の女性、芽衣は遠く窓の外を見つめながらそ
う答える。

「明、私達も準備を始めましょ

長い髪を揺らしながら芽衣はデスクの方へ歩いていく。
その後に明もついていく。

明の身長は芽衣の頭一個分くらい高い。

二人が並ぶとまるで雑誌から抜け出たモデルのようだ。

「特別死体処理班」…それが彼らの属するところだ。

Sランク指令のためだけに用意されているものである。

芽衣と明はすぐにコンピュータを起動させた。

「久々の最前線でどんな動きを見せてくれるか楽しみだ」

明が楽しそうに言つ。

「そうね、やつとまた少し近づけたわ。この3年間…ずいぶん遠くに感じたもの」

そう、芽衣にとつてこの3年間は長すぎたに違いない。

たつた一人の肉親と、近い場所にいるのに会えないのだ。

芽衣はこうして見守ることしか出来ない。

彼らが最前線へ戻つたことで、芽衣の心も踊つていた。

もしかしたら会えるかもしれない…。

芽衣は期待を胸に秘め、コンピュータを見つめた。

あの日から一週間、伽羅はいつも通り学校へ通つていた。

もちろん指令もきちんとこなしている。

ただほんの少し心に穴が開いているような、そんな日々を送つていた。

「伽羅お待たせ、帰る?」

奈緒だ。

「うん、委員会どうだつた?」

「ちょっと大変だった。ほら実行委員会が設置されちゃつたでしょ?だからそつちの方まで出なきやいけなくて」

二人は昇降口へ向かいながら話を続ける。

学校ではちょっとした行事があるたびに大騒ぎなのだ。
必ずどこかの委員会が大忙しになる。

伽羅はいつも奈緒が委員会を終えるまで、最近いつもこうして待っているのだ。

二人で帰る時間は心の休まるひと時だから。

「ところで伽羅最近……！」

こっちを向いていた奈緒の表情が変わる。

「奈緒？」

「逃げて伽羅っ……！」

「えつ？」

ガシツ

「つぐ」

大きな手が伽羅の口をふさぐ。

両手は後ろで強く拘束されていた。

「伽羅っ！」

一人の男に腕をつかまれながら、必死に抵抗する奈緒の姿が目に入る。

一瞬の出来事だった。

二人は数人の黒づくめの男達に捕らえられていた。

「まさかお嬢ちゃんが本当に生きていたとはなあ……。しかも人殺しになっているなんて、大した落ちぶれ方だ」

一人の老人が姿を現した。

「！？」

ぐつと伽羅が身をよじる。

（どうしてこの人たちが知つてゐのつ？）

伽羅は顔を逸らした。

奈緒に聞かれてしまうなんて……。

心の中がまるで波立つたようにざわめき始める。

「嵯峨見愛都……お嬢ちゃんは大切な人質だ。少しの間眠つてもらうよ……やれっ！」

「伽羅っ……！」

ドスツ

腹部に強烈な痛みが走った。意識が遠のいていく。

「奈…緒…」

伽羅の体から力が抜けた。

「伽羅をどうするつもりっ？」

「ほひ、威勢のいいお嬢さんだ。しかしね、こちらのお嬢さんはアントナとは別世界の住人さ。知らないほうがいい。そっちのお嬢さんも眠らせてやれ」

「はい」

返事をすると、男達が奈緒を取り囲む。

「ちょ…」

ドスツ

奈緒の腹部にも強烈な痛みが走り、意識が遠のいていく。

（伽羅…）

奈緒の瞳が閉じられた。

「フン、これであの組織をつぶせるかもしれん…」

老人は不敵な笑みを浮かべた。

そう、この老人こそ3年前伽羅の両親を殺させた政治界の陰の大物、黒川昭造だった。

その頃蒼衣達はすでに黒川低の傍で様子を窺っていた。

何台か、黒光りする車が門の中へ入つていく。

「戻ってきたな」

「ああ、しかし… 一台の車にずいぶん乗つていなか？」

斗希がじつと車を見つめて呟く。

黒いフィルムが張られた車窓から、街灯のおかげでようやく分かる人影が見えた。

確かに多すぎる。

数分後、またもう一台の車が発車して、どこかへ行つた。

「どうする？ 追うか？」

蒼衣が問う。

「いや、黒川ではないようだ。…赤外線、ゴーグルはつけているな？」

「ああ」

「一分後に行動開始だ、これだけ暗ければ充分だろう。あと三十秒だ

「了解」

ザツ

二人は少し離れて構えた。

「雑魚は俺の能力ちからで眠ねらせる」

通信機を通して斗希の声がした。

「了解。…行くぞ」

「よし」

二人は勢いよく走り出した。

門を軽く飛び越え中に潜入する。

ゴーグルに移つた生体反応は六つ。

「蒼衣、走つて奥まで行くぞ！」

「よつしゅ

バンッ

「なつ、何だお前らつ！？」

瞬時ざわめきが起こつた。

「ふつ、うるさい奴らだ。そこいら辺で眠つていら…」

斗希が足を止め、ふつと笑う。
そしてキツと相手を睨んだ。

「なつ…」

次々と相手は床に倒れこむ。

これが斗希の念能力なのだ。

相手に催眠をかけることが出来る。

「サンキュ」

「礼などいい。奴はこの奥だ、いいな？」

二人は一つの扉の前で足を止めた。

そしてゆっくりとドアノブを回す。

「何だ？用があるならノックをせんか」
奥から声がした。

「残念だつたな」

「なつ！？お前達はつ！？」

驚いた黒川が椅子から勢いよく立ち上がる。

二人は真つ直ぐ奴を見据えた。

「アンタなら知つてゐるだろう？しかしそれもムダだな」
斗希が冷酷な目を向ける。

「黒川昭造、アンタだけは許せない…！死んでもらう」
チャツ

蒼衣は真つ直ぐ銃口を向けた。

「お、おいつ」

慌てふためき黒川がオロオロし始める。
しかし二人が動じることはない。

が。

「？」

突如黒川がニヤリと笑みを浮かべた。

「いいのかい？私を殺しても…」

「何だと？」

「こつちには人質がいる。このお嬢さんともう一人ね…」

ガラツ

クローゼットが開けられる。

『！？』

そこにいたのは奈緒だつた。

「もう一人はどこだ！？」

蒼衣が問う。

「もう一人？今頃港の倉庫で一人ぼつちだらつむ」

「何：？」

「誰なんだ、もう一人というのは」

冷静なまま斗希が問う。

クツクツクツ

黒川が不敵な笑みを浮かべた。

「しかしそれを知ったところでどうにもなるまい。一般人の前で私を殺すことが出来るのかい？」

かろうじて意識はあるものの、ぐつたりした奈緒の顔を蒼衣たちのほうへ向けさせる。

黒川は勝ち誇ったように笑った。

しかし。

「残念だつたな、つて言つただろ？ 忘れたのか？」

「もうろくじじいめ」

「なつ…」

蒼衣はたじろぐ黒川に再び銃を向けた。

「人質なんて俺達には無意味なんだよ。…終わりだ」

ダンツ

蒼衣はトリガーを引いた。

弾は寸分違わず黒川の心臓を打ち抜いている。

ズルリと黒川の体が床に倒れた。

「ふう、全く馬鹿な奴だ」

斗希はやれやれと息を吐く。

蒼衣は銃をしまうと奈緒のほうへ歩いていった。
そして猿ぐつわや縄をほどく。

「正直驚いたよ、アンタが人質になつてるなんてな

「ありがとう、少しばお役に立てた？」

ぐつたりしたまま、奈緒が冗談を言つ。

「充分役に立つたよ」

蒼衣は応じて笑つた。

「それより、伽羅が危ないわ。今すぐ行つて」

「ああ、アンタは一人で平氣か？」

「うん。港の第5倉庫よ、そこに伽羅はいるわ

「サンキュー」

蒼衣はそう言つと、斗希と二人で走り去つていつた。

部屋には奈緒だけが残される。

（お願い、伽羅を助けて…！）

奈緒はふらつきながら立ち上がり、急いで部屋を抜け出した。

波の音だけが響く港の倉庫、そこへ蒼衣達はバイクを飛ばした。そう遠くはない、もう倉庫は見えている。

恐らく田所が何らかの形で伽羅のことを黒川に伝えたに違いない。黒川ほどの大物が暗殺組織の存在を知らないはずがないのだ。伽羅を使ってR・Zを陥れようとしていたことはすぐに想像がつく。二人は5の書かれた倉庫前にバイクを止めた。

「鍵がかかってる」

「重そうだな」

斗希がゴーグルで鍵の大きさを測定する。

「俺が開ける」

蒼衣はそう言つと、目を閉じ一点に神経を集中させた。すると倉庫の中に金属のこすれあう音がこだまする。

「何者だっ？」

黒づくめの男達が中から飛び出してきた。

「ちつ。お前等など相手にならん」

「全く同感」

「蒼衣、お前は行け。こいつらは俺が」

斗希が言つと蒼衣はうなずき中へ向かう。

そして次の瞬間、目の前で銃を構えていた男達が次々と倒れこんでいった。

「伽羅！」

中へ入ると手足を縛られたまま伽羅が倒れていた。蒼衣はすぐに縄をほどき抱き起こす。

「伽羅？」

「……蒼衣……？頭がぐるぐるするの……それに蒼衣が万華鏡みたいに見える……」

朦朧とする意識の中で伽羅は呟くよつとひそつと言つた。

「何だつて？まさか……麻薬！？」

蒼衣は伽羅の腕を持ち上げた。

あつた……！

薬を打つた跡だ。

早く解毒剤を打たなければ大変なことになつてしまふ。

蒼衣はすぐに山神に連絡した。

近くで待機している山神ならすぐにここへ来る。

数分後、山神が車でやつてくると蒼衣はそこへ伽羅を乗せ、斗希と二人で山神の後をバイクで走つた。

R - Z本部へ行けば解毒剤がある。

ビルへ着くと伽羅はすぐさま医務室へ運ばれた。

医療技術も持ち合わせている蒼衣は手際よく伽羅に点滴を打つ。

ぐつすり眠る伽羅を見ると斗希と山神は医務室を出た。

蒼衣はぎゅっと伽羅の手を握る。

自分のいない所でこんな事が起きるとは……。

もしや伽羅の記憶が黒川に会つたことで甦つているのではないか。

蒼衣は眠つている伽羅の顔を心配そうに見つめた。

点滴は一定の間隔をあいて一滴ずつ落ちていく。

伽羅の目が覚めてから一番に目に入ったのは点滴だった。

「蒼衣…」

名前を呼んでみる。

が、返事はない。

「いるわけないか…」

ポツリと呟く。

どうやら自分は病院のよつなどこにいるらしい。

伽羅は辺りを見回した。

出入り口の他にもう一箇所、カーテンで仕切られている場所を見つけた。

あの部屋は何だろう。

少し見つめてから、伽羅は再び天井を見つめた。まだ少し頭がぼんやりしている。

すると

「はよ。気分どうだ？」

奥のカーテンを開けて、蒼衣がやつてきた。

「あ…、うん。大丈夫、少し」

どうやら伽羅は安堵したらしい。

弱々しくも明るく笑つた。

「ドラッグ打たれて幻覚症状起こしてたんだ。でも解毒剤打つてから、そのうち意識もはつきりしてくるはずだ」

そう言って、蒼衣は側にあつた丸椅子に腰掛ける。

伽羅はじつと天井を見つめていた。

そして。

「ね、蒼衣…。話してくれないかな、3年前のこと」

「!?」

蒼衣は驚きを隠せなかつた。

やはり、記憶は甦っていたのだ。

「ずっと、少しずつだけ思い出しえめてたの。それであの人の声を聞いて、全部思い出した。ぼやけて動く影は、倒れていくお父さんとお母さん。あの赤い景色はその時の血で、鈍い銃声がして、私にあの冷たい銃口が向けられてた」

「本当に、全部思い出したんだな？」

「うん…。すごく怖かった、でもお父さん達の事忘れないの。このまま忘れない。私は一人じゃなかつたんだもん。だから話してほしいの。そうしたら思い出に出来るでしょう？」

強がつているわけではなかつた。

が、下を向いたまま蒼衣はうなづくことが出来なかつた。

「知らずにいるほうが苦しいよ。思い出せないほうがつらい。だから…お願い、蒼衣

伽羅の澄んだ瞳が蒼衣を見つめる。

すると、蒼衣は覚悟したように息を吸つた。

「分かつた」

そして蒼衣は話し始める。

「あの日俺と斗希は標的の動きを追つてたんだ。そして偶然にも奴らはお前の家へ入つていつた。でも俺たちは家の中まで入るわけにはいかない。だから外でずっと見張つてた。夜つてこともあって周りには誰もいなくて、ゴーグルで中の生体反応を見ると、5個の反応があつたんだ。それから数分後、突然銃声が聞こえた」

遠くを見つめて話す蒼衣。

「お父さん達が、撃たれたのね？」

伽羅は蒼衣の顔を覗き込んだ。

「ああ。俺たちは急いで中へ入つた。でももつお前の両親は殺された後で、奴らの銃口はお前に向けられていた。俺達は奴らの手を封じて、お前を助け出したんだ。お前は気を失つてたから、その後の事は覚えてないだろうけど。俺たちが外にいた間、中で何が起きていたかは分からぬ。でもこれだけは確かだ。お前の両親は、お前

を守ったんだ」

最後にそう言って、蒼衣は優しく微笑んだ。

「そつか…」

そう呟いた伽羅の目には今にも溢れそうなくらいの涙が浮かんでいる。

まだどこかで強がっているのだ。

必死に涙をこらえようとしている。

「バカだな。泣いていいよ、俺しかいないんだから」

蒼衣はそう言つて伽羅の額に手を当てた。

そして伽羅が蒼衣の手の上に自分の手を乗せる。

涙は自然に零れ落ちた。

「あと一つだけ聞いてもいい?」

「ん?」

蒼衣は耳を傾ける。

「私が蒼衣を好きな気持ちは、誰かに作られたものじゃないよね?」

「…」

伽羅は密かに不安になっていたのだ。

もし自分の記憶が誰かに封じられていて、作り変えられていたとしても、蒼衣を想うこの気持ちはもしかしたら「作り物」なのかもしれない。

「俺は、詳しい事は知らない。だけど、もう手遅れだよ」

「?」

伽羅は蒼衣の顔を見た。

彼の頬は真っ赤に染まっている。

「俺はもう前には戻れないからな」

「蒼衣…。蒼衣は知ってる?私がいつから蒼衣を好きだったか

「知らない」

蒼衣は耳まで真っ赤になつた顔をうつむかせた。

伽羅は嬉しくなつて泣き笑いになつてしまつ。

「私にも解んない。でも、この気持ちは作り物じゃないよね」

伽羅はそう言つて、また涙をこぼした。

照れた顔で、蒼衣が笑う。

いつもと変わらない優しい笑顔。

それを見てしまったと余計に涙は止まらなくなつた。

自分の手を握つてくれてる蒼衣の手が温かい。

伽羅の手がすっぽり隠れてしまうほどの、温かくて大きな手。

大丈夫、私には蒼衣がいてくれる。

だからきちんと思い出に出来る。

：お父さん、お母さん、ありがとう。

伽羅は心の中で呟いた。

「良かつた、伽羅ちゃんもう大丈夫ね」

窓の外で雪乃是二人の姿を見守つていた。

斗希から連絡をもらつた雪乃是急いで飛んできたのだ。

もしものためだ。

しかしどうやら雪乃の能力を使う必要はなさそうだ。

「今こうして考えると、伽羅ちゃんの記憶を封じたこと、あれは本当に良かつたのかしらね」

「その答えは本人が決めることだ。大丈夫だろう、何せ蒼衣の選んだ奴だからな」

ガラにもなく斗希が言う。

「何よ、何だかずいぶん優しいじゃない？」

からかい半分で雪乃是言つた。

横では修一が笑つてゐる。

斗希の気持ちが何となく分かるのだ。

全く、素直じゃない。

本人がいたら今のようなことは絶対言わなかつただろう。

意外と不器用なのだ、斗希も蒼衣も。

雪乃と修一は顔を見合させて笑つてゐた。

「それにしても蒼衣ちゃん、ずいぶん強くなつたわね。少し前とは比べ物にならないくらい強くなつたわ。何があの子を強くしたのか

しら

「…なんだ、急に」

斗希が雪乃の方を向いて問う。

「つまり、守るものがあつたから強くなれた、違う?」

雪乃は斗希に視線を向けた。

「本当は斗希ちゃんも分かつてたんじやない?だけど、敢えて離した。本当に壊れないかどうか、その結果を信じたいから」

「…さあな」

斗希はわざとらしく首をかしげた。

「ねえ、本当にこのままでいいの?今がベストだとは思えないわ。斗希ちゃん、一人が嫌なら蒼衣ちゃん達と一緒になればいいのよ」「別に俺は一人でも構わないさ、馴れ合つのは好きじやない。それに蒼衣はともかく、あの二人は嫌がるんじやないのか?」「…そんなことないんじやない?だってずーっと蒼衣ちゃんを見てきたのよ?あの二人は、問題ないとと思うけど?」

くすっと笑つて雪乃是言つた。

いつもと変わらない態度の中に、斗希の寂しさがほんの少し見え隠れする。

これは今に始まつたことではないはずだ。

一番寂しがり屋なのは本当は斗希かもしれない。

雪乃はそんな斗希を可愛く思うのだった。

コンコン

ドアがノックされた。

そしてドアが力チャリと回されると静かに雪乃が入つてきた。

「どう? 気分は」

雪乃が優しく微笑んで問う。

「もう大丈夫です。気持ち悪いのも治つたし…」

伽羅は笑顔で答えた。

「そういえばまだ名乗つてなかつたわね。私は雪乃よ、よろしくね」

「ひなこ」

「うん、大丈夫そうね。顔色もだいぶ良くなつたみたい。あとは食べるもののちゃんと食べて、しつかり体力つけねば起きらわれるわね」雪乃も心配していたのだ。

それはその表情からも分かる。

一滴ずつ落ちていた点滴も、もつ二分の一程度になつっていた。

「ねえ伽羅ちゃん、手を握つてもいい?」

「?はい」

細く暖かな手が伽羅の手を包む。

「ゆっくり目を開じてね」

そう言われると、伽羅はそつと目を開じた。

体中が温かくなつていく。

春の日差しのように温かく、気持ちがいい。

(「はは…ひは…)

見えるのは一面の花畠だ。

(お父さん?お母さん?それに…小さじ頃の私…?)

夢を見てくるのだ。

夢だとすぐに分かる、夢。

でもどこか現実のような氣もする。

伽羅は静かに眠り始めた。

「大丈夫よ、眠つただけ。…あの」と、話したんでしょう?」

「うん」

蒼衣は不思議そうな視線を向ける。

「私から伽羅ちゃんへのちよつとしたプレゼントよ。優しい思い出も必要でしょ?今のままじゃショックが強すぎて、優しい思い出まで自然とトニーとわれちやうわ。だから、ね

雪乃は穏やかに答えた。

「伽羅ちゃんは逃げようとしたしなかつた。わちゃんと真実と向き合つた。だから「ほづびよ。一生傷は消えなくても、優しい思い出が残つていれば、絶対がんばつて生きていける。…そうね、蒼衣ちゃんにも

「ほづびをあげなきや」

そつ言つと雪乃是まるで子供を抱きしめるよつに蒼衣を抱きしめた。
「蒼衣ちゃん、体の中に残つてゐる毒は今のうちに全部出しちゃいな
さこよ。私が全部消してあげるから」

「雪乃さん…。俺、どうしていいかずつと分からなかつた。ずっと
不安で、心配で。俺、組織が考へてること解んないよ。何で俺達な
んだろう、最前線に行かなきやいけなくて、いつも振り回されて」
素直に蒼衣の口からはそれらの言葉が出てきた。

今まで誰にも言えず、抱え込んできたもの。

それでもまだ全てではないだろつ。

でも。

「そうね、人は誰でも答への出せない悩みを持つてるものだわ。私
達の場合、それが少し大きいのね。だから辛くて苦しくて。でもね、
大丈夫よ。その分蒼衣ちゃんは強くなつたわ。それにもう、伽羅ち
やんを傷付けるものは何もなくなつたわ」

「そつかな…」

「ええ。後は蒼衣ちゃんがそばにいてあげて、喧嘩をしなければね
雪乃是冗談めかしてそう言つた。

そんな雪乃に蒼衣は身を任せる。
姉のようで、母親のように温かい。

次第に心が軽くなつていく。

「ありがとう、雪乃さん。もう大丈夫だよ、斗希の所に行こつ
雪乃もうなずき立ち上がる。
二人は静かに部屋を出た。

そしてそれから一週間が過ぎた。

「俺もーヤダツ!! 何でこんな奴がいるんだよーつー」

突然董から抗議の声があがる。

「いちいちうるさいな、このほたる(・・・)は。全くどういう髣
をしたんだ、蒼衣」

「つかーつ！ほたるつていうな、ほたるつて！」

「あんまりいぢめるなよなあ。フォローすんのは俺なんだから」
呆れ顔で蒼衣が返した。

まるで犬とサルだ。

あの後何故か上からの命令で、こうして斗希も一緒になつたのだ。
もちろん、螢と伽羅も一緒に、以前暮らしていたマンションで。
蒼衣も、最初から螢が斗希を嫌いしているのは知っていた。
確かに分かつていたはずである。

が。

ここまで来るともうどうでもいいかな、といつ氣になつてしまつのだ。

いつものことだと。

「あの一人、性格は正反対だけど、きっと似たもの同士なんだよね
くすくすと穏やかに笑いながら伽羅が言う。

「あんなあ…。確かにそうなのかも知んないけど、毎回巻き込まれ
る俺の身にもなつてみろ？そんな事言つてらんなくなるぞ」
と、げつそりしながら蒼衣が言つ。

「要領が悪いのよ、蒼衣は」

そう言って、伽羅はまた笑つた。

蒼衣は深く溜息をついた。

返す言葉もない。

そんな蒼衣の横でまだあの一人は言い合つている。

蒼衣は横目で一人を睨んでやつた。

いい加減やめてほしい。

心底そう思う。

あれから、伽羅は少しづつ元の明るさに戻り始めていた。

少しの間、奈緒に正体を知られてしまったショックや、記憶が甦つ
たことなど、精神的にこたえたらしく、何も食べられなくなり体調
を崩して寝込んでいたこともあったのだ。

けれど今はこうして起き上がり、このやかましさでも笑つていられ

るほどになつたのだ。

蒼衣は心配しつつもほつと安心し、微笑みがこぼれた。

「ポポポポ

「コーヒーの何とも言えない香りが部屋に漂つてくる。

「ねー、修ちゃん、チーズケーキと抹茶ケーキどっちがいい？」

キッチンで雪乃が嬉しそうに問つ。

「抹茶。ん？お前二つもケー キ焼いたのか？」

手にしていた本を置いて修一が立ち上がつた。

「うん。まあいいじゃないの」

「ほー」

「後で蒼衣ちゃんの家に持つていこうね」

嬉しそうに雪乃は笑つてそう言つた。

そんな雪乃を見て修一も自然と笑みがこぼれる。

そして再び本を手に持ち目を通し始めた。

本を読んでいても雪乃の笑顔が思い浮かぶ。

修一はそんな自分に照れながら平静を装つて、コーヒーを口にした。

それは平和な午後の、ほんのひと時…。

よく晴れた日曜日。

外へ出ると眩しい太陽がビルの立ち並ぶ街並みを照らしていた。
横をすり抜ける風が温かい。

どうやら春ももうすぐのようだ。

新しい季節が始まる。

そこにはほんの少し大人になつた横顔があつた。

今はまだ何も見えない。

でもきっと、この先には必ず道があるはずだ。

例えそれが血に染まっていても、周りには支えてくれる誰かがいる。
仲間であり、ライバルであり、大切な誰かが。

日に透けて薄茶色になつた蒼衣の前髪を優しく風が揺らす。

こんな日は一人で外を歩くのも悪くない。

蒼衣は桜並木を歩き出した。

木の枝にはたくさんの蕾がついている。

今たくさん命が動き出そうとしているのだ。
だから…。

蒼衣は歩き出したのだ。

暗闇の広がるその未来へ、光を求めて。

「姉さん、俺…強くなれるかな…」

蒼衣は呟いて空を見上げた。

雲一つない青空。

それは遠く姉の、笑顔のいたえのようだつた…

Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504z/>

RED ZONE

2011年12月29日19時51分発行